宮古市埋蔵文化財調査報告書27
Archaeological Researches in Miyako

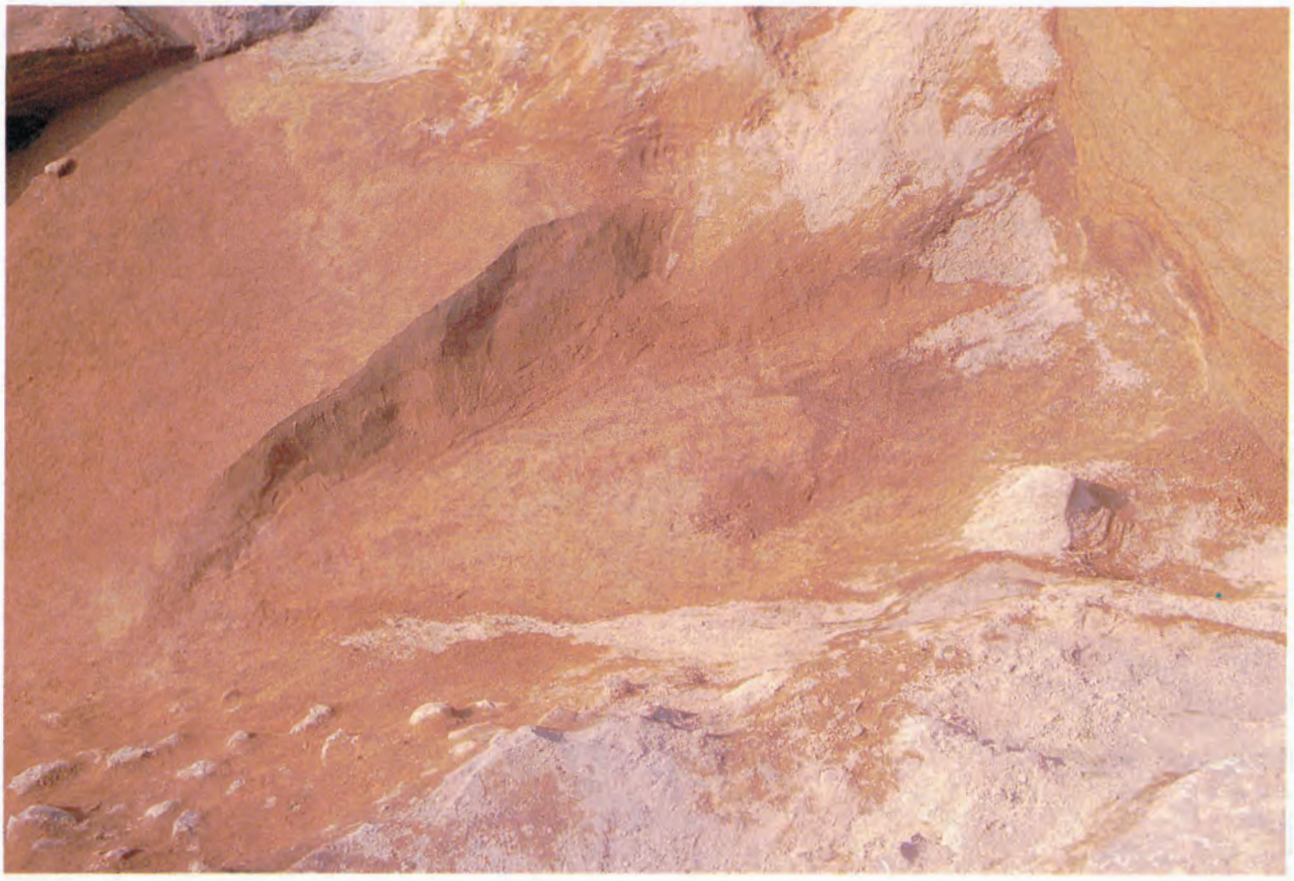
青猿Ⅰ遺跡・千徳城遺跡群

—平成元年・2年度発掘調査報告書—

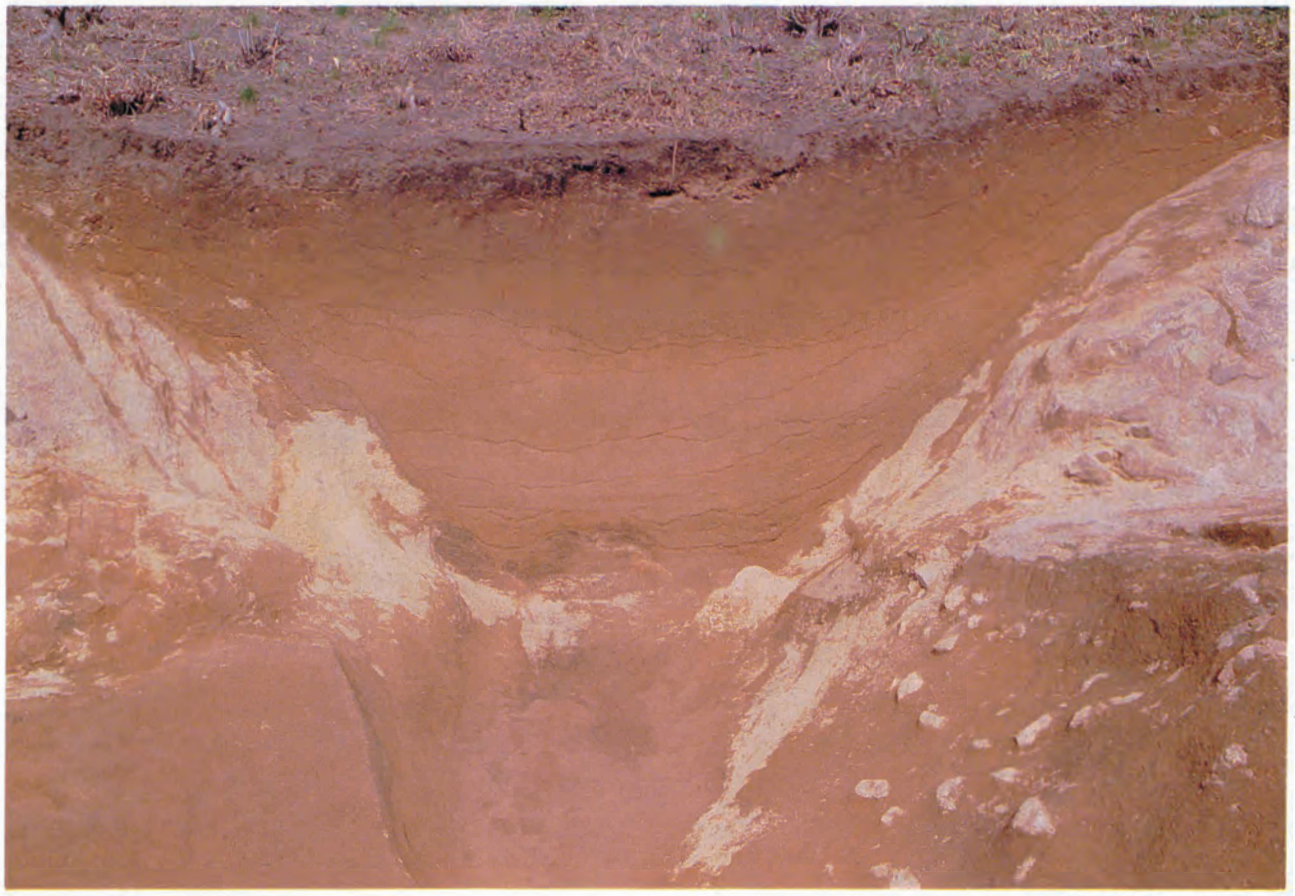
千徳城遺跡群

1991.3

岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.



縦堀り跡



縦堀り跡（断面）

序　　文

宮古市は、陸中海岸国立公園のほぼ中央部に位置し、海・山・河と豊潤な自然に恵まれた本州最東端の都市です。

市内には、私たちの先人たちによって守り受け継がれて来た数多くの文化遺産が残されています。なかでも、埋蔵文化財としての遺跡は、市内一円に443ヶ所も確認されています。しかしながら、近年、種々の開発事業に関連し多くの遺跡が消滅しようとしています。

宮古市教育委員会では、文化財の保護と正しい理解のもとに後世に伝える責務から、遺跡の保存と周知徹底を図っているところであります。

本書は、宅地開発に伴ない止むなく消滅することとなりました青猿Ⅰ遺跡、千徳城遺跡群の発掘調査の内容をまとめたものであります。青猿Ⅰ遺跡からは、平安時代の竪穴住居跡、千徳城遺跡群からは、縦堀跡などが発見されており、過去の調査結果とも重ねあわせ、非常に貴重なデータを得ることができました。

本書が研究者のみならず、文化財の保護と愛護、ならびに郷土文化の理解のために広く、多くの皆様方に活用されることを願うものです。

最後に、調査ならびに本書の刊行に際し多大なる御協力を賜わりました株式会社伊藤礦業所、山口産業株式会社、実際に調査作業に従事していただきました市民の皆々様をはじめとする方々に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成３年３月

宮古市教育委員会

教育長　佐　藤　勇　逸

例　　言

1．本書は、青猿Ⅰ遺跡・千徳城遺跡群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、株式会社伊藤礦業所（青猿Ⅰ遺跡）、山口産業株式会社（千徳城遺跡群）の委託を受け、宮古市教育委員会（教育長　佐藤勇逸）が主体となり実施した、記録保存を前提とした緊急発掘調査である。

3．調査座標は、平面直角座標第Ⅹ系に基づき設定したものでⅩ系値をそのまま表示した。小数点以下はすべて000である。

4．高さは、標高値をそのまま使用した。

5．土層観察に際しては、『新版標準土色帖』(1967　小山正忠・竹原秀雄）を参考とした。

6．発掘調査及び本書作成にあたり、次の方々からの御教示、御指導を頂き、記して感謝申し上げます。(順不同、敬省略)

- 岩手県教育委員会文化課　相原康二　高橋信雄　熊谷常正
- 岩手県立博物館　佐々木勝　佐々木清文　佐藤嘉則
- 岩手県埋蔵文化財センター　小田野哲憲
- 宮古市教育委員会　岸昌一　竹下将男
- 宮古市文化財保護審議会委員　斉藤英樹

7．本文中の引用文献の略称は次の通りとした。(すべて宮古市教育委員会刊行)

『宮古市遺跡分布調査報告書　1～4』　武田将男　1983～86⟶『分布調査　1～4』

『宮古市遺跡分布図　昭和60年度版』　武田将男　1986⟶『分布図86』

8．本書の執筆・編集は、鎌田・高橋・阿部が行なった。

目　　次

序　文
例　言
目　次
Ⅰ　調査経過
　1　調査に至る経過……1
　2　調査体制……2
Ⅱ　遺跡をとりまく環境
　1　青猿Ⅰ遺跡の立地と環境……7
　2　千徳城遺跡群の立地と環境……8
Ⅲ　青猿Ⅰ遺跡
　1　調査の経過……11
　2　調査の概要……11
　3　調査内容……15
　4　調査のまとめ……30
Ⅳ　千徳城遺跡群
　1　千徳城遺跡群について……31
　2　調査内容……36
　3　調査のまとめ……40
写真図版

挿 図 目 次

第１図　位置図……3
第２図　地形分類図……4
第３図　青猿Ｉ遺跡と周辺地形図……5・6
第４図　千徳城遺跡群と周辺地形図……9・10
第５図　青猿Ｉ遺跡調査区位置図……12
第６図　青猿Ｉ遺跡調査区全体図……13・14
第７図　第１号竪穴住居跡……16
第８図　第１号竪穴住居跡出土遺物……17
第９図　第２号竪穴住居跡……18
第10図　第２号竪穴住居跡カマド跡……19
第11図　第２号竪穴住居跡出土遺物……20
第12図　第３号竪穴住居跡出土遺物……22
第13図　第３号竪穴住居跡……23
第14図　第２号・３号竪穴遺構、第１号土坑跡……25
第15図　第３号竪穴遺構床面ピット断面図……26
第16図　第２号・３号土坑跡……28
第17図　第４号土坑跡……29
第18図　千徳城周辺の城館位置図……32
第19図　千徳城遺跡群調査区位置図……34
第20図　千徳城遺跡群調査区全体図……35
第21図　縦堀跡平面図……37
第22図　縦堀跡断面図……38
第23図　道路状遺構図……39

写真図版

第１図版　青猿Ｉ遺跡遠景、調査区（Ｌ区）　第２図版　第１号竪穴住居跡、第２号竪穴住居跡
第３図版　第２号竪穴住居跡、同掘り上がり　第４図版　第３号竪穴住居跡、同断面
第５図版　第３号竪穴遺構、第１号土坑跡　第６図版　青猿Ｉ遺跡調査区、同Ｊ区
第７図版　第４号土坑跡、同断面
第８図版　千徳城遺跡群調査区近景、縦堀跡
第９図版　縦堀跡、同断面
第10図版　道路状遺構、断面図
第11図版　洞区（雨列跡?）、同断面

Ⅰ　調査経過

1．調査に至る経過

宮古市内には、現在のところ443ヶ所の埋蔵文化財包蔵地である遺跡を確認しており、教育委員会では『分布調査　1～4』、『分布図　86』などや埋蔵文化財発掘調査報告書第24集までを刊行し、遺跡の保護・保存に周知しているところである。しかしながら、宅地となりうる平坦部がすくないという沿岸地域の地形的要因もからみ、周知の遺跡を含む地域の開発が多くなっている。それに伴ない、開発側との事前の協議も増しており、今回発掘調査を実施した青猿Ⅰ遺跡、千徳城遺跡群についても、繰り返し事前協議を続けて来たところである。その結果、どちらも遺跡の一部の破壊がまぬがれないこととなったため、記録保存を前提とした緊急発掘調査として宮古市教育委員会が主体となって実施したものである。

事前協議

緊急発掘調査

青猿Ⅰ遺跡

青猿Ⅰ遺跡は、宮古市大字千徳第3地割字青猿地内に所在し宮古市遺跡コードＬＧ33―0220として登録されている周知の遺跡である。

本遺跡は、宮古市の中心部市街地の西側にあたり宅地開発を目的とする造成工事の開発事業が最も進む地区のひとつとなっている。本遺跡は昭和62年（1987）に一度、その一部の発掘調査を実施しており現在は、すでに宅地となっている（第5図参照）。

今回の発掘調査は、昭和62年に実施した地区の東側から南側にかけての一帯を同様に宅地に造成することとなったために、事前に協定を締結し実施した。調査は、平成元年（1989）と2年（1990）の2ヶ年に分けて行なった。1年目は、H区、Ⅰ区、J区を行ない、2年目は、K区、L区の調査を行なった（第5図参照）。

千徳城遺跡群

千徳城遺跡群は、宮古市大字千徳地内に所在し、宮古市遺跡コードＬＧ33―0197として登録されている周知の遺跡である。

本遺跡群は、千徳城・千徳古城・堀合館の中世城館跡と縄文時代から平安時代の集落跡などで構成される複合遺跡である。

本遺跡群の西側一帯は、すでに大規模な住宅地（西ヶ丘団地）として開発されており遺跡群の間近かのぎりぎりまで住宅がせまっている。

今回の発掘調査は、北西部の尾根と洞の一部を宅地として造成するため事前に実施したものである。当該地は、昭和62年（1987）に試掘調査を実施しており、すでに道路状遺構を確認していたものであった。また、伐採木搬出のために付設された道路のカッティング面には、縦堀跡と思われる遺構の断面も見えていた所であった。

試掘調査

2　調査体制

各遺跡の発掘調査は，いずれも宮古市教育委員会が各遺跡の発掘調査委託者の協力のもとに行なった。調査の体制は次のとおりである。

青猿Ⅰ遺跡

〈平成元年度〉

調査総括　摂待　保典　宮古市教育委員会社会教育課長
　　小本　　哲　宮古市教育委員会社会教育係長
調査員　　高橋憲太郎　宮古市教育委員会社会教育係主事
　　鎌田　祐二　宮古市教育委員会社会教育係主事（主担当）
　　盛合　義信　宮古市教育委員会社会教育係主事

〈平成２年度〉

調査総括　大森　　翼　宮古市教育委員会社会教育課長
　　小本　　哲　宮古市教育委員会社会教育係長
調査員　　高橋憲太郎　宮古市教育委員会社会教育係主事
　　鎌田　祐二　宮古市教育委員会社会教育係主事（主担当）
　　鶴田　　均　宮古市教育委員会社会教育係主事
　　阿部　　豊　宮古市教育委員会埋蔵文化財調査員（平成２年９月より非常勤）

調査の実施にあたり、次の各位から多大なるご協力を頂いた（敬省略、順不同）

調査協力　株式会社伊藤礦業所（代表取締役　塚田嘉則）

◎発掘調査　村岡憲一　木村博　山本寛　神林信吉　菊池清八　佐々木重幸　熊谷武彦
　　大田禪　佐伯裕則　大超貞蔵　石井和彦　伊藤晴男　佐々木茂　北村忠治
　　刈屋昭三　古館友三

◎整理作業　古館友三　佐々木茂

千徳城遺跡群

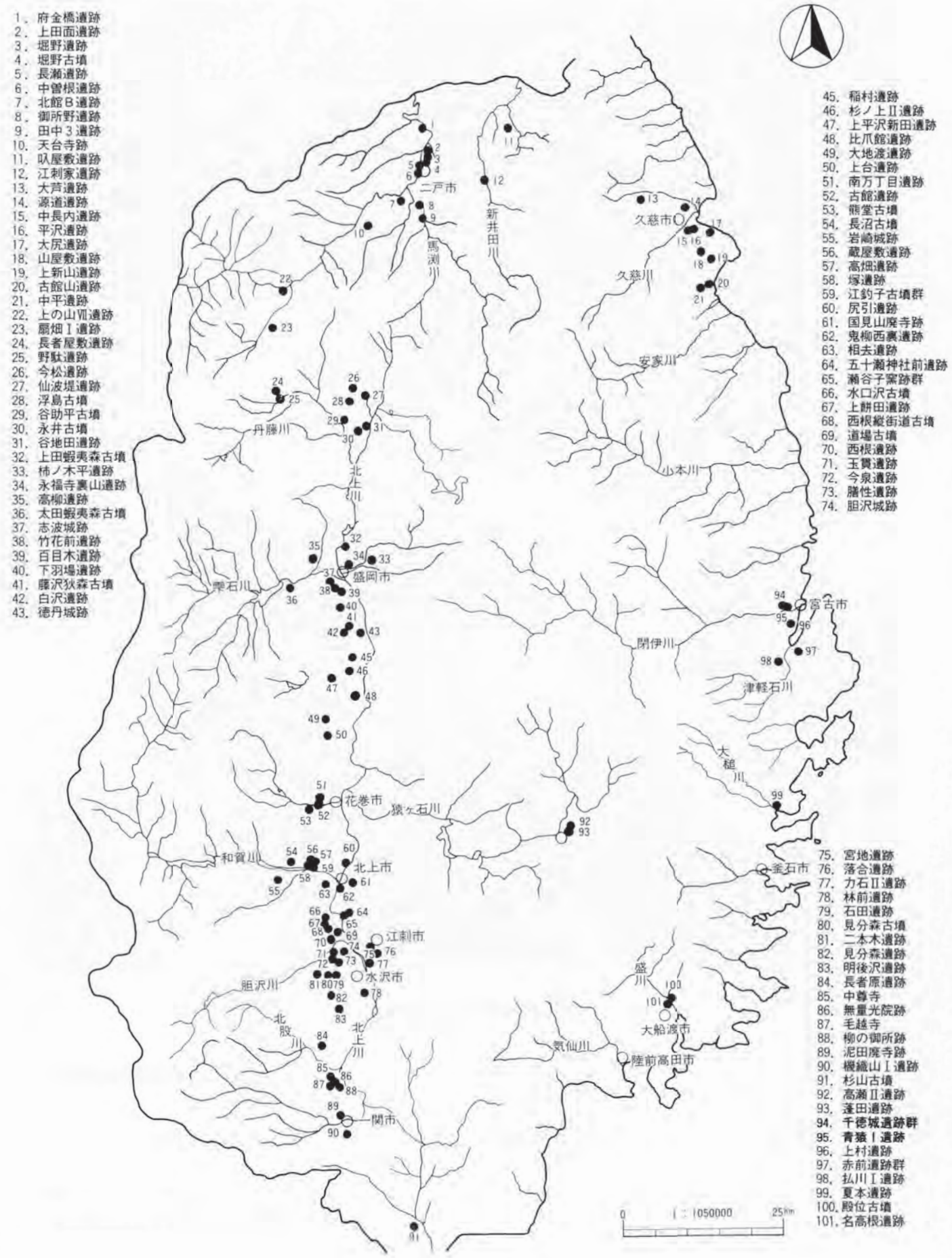
調査総括　大森　　翼　宮古市教育委員会社会教育課長
　　小本　　哲　宮古市教育委員会社会教育係長
調査員　　高橋憲太郎　宮古市教育委員会社会教育係主事
　　鎌田　祐二　宮古市教育委員会社会教育係主事（主担当）
　　鶴田　　均　宮古市教育委員会社会教育係主事
　　阿部　　豊　宮古市教育委員会埋蔵文化財調査員（平成２年９月より非常勤）

調査の実施にあたり、次の各位から多大なるご協力を頂いた（敬省略、順不同）

調査協力　山口産業株式会社（代表取締役　山口登）

◎発掘調査　伊藤晴男　佐々木茂　北村忠治　木村博　刈屋昭三　藤谷晶子　菅原テルミ

◎整理作業　佐々木茂　古館友三


1. 府金橋遺跡
2. 上田面遺跡
3. 堀野遺跡
4. 堀野古墳
5. 長瀬遺跡
6. 中曽根遺跡
7. 北館B遺跡
8. 御所野遺跡
9. 田中3遺跡
10. 天台寺跡
11. 叺屋敷遺跡
12. 江刺家遺跡
13. 大芦遺跡
14. 源道遺跡
15. 中長内遺跡
16. 平沢遺跡
17. 大尻遺跡
18. 山屋敷遺跡
19. 上新山遺跡
20. 古館山遺跡
21. 中平遺跡
22. 上の山Ⅶ遺跡
23. 扇畑Ⅰ遺跡
24. 長者屋敷遺跡
25. 野駄遺跡
26. 今松遺跡
27. 仙波堤遺跡
28. 浮島古墳
29. 谷助平古墳
30. 永井古墳
31. 谷地田遺跡
32. 上田蝦夷森古墳
33. 柿ノ木平遺跡
34. 永福寺裏山遺跡
35. 高柳遺跡
36. 太田蝦夷森古墳
37. 志波城跡
38. 竹花前遺跡
39. 百目木遺跡
40. 下羽場遺跡
41. 藤沢狄森古墳
42. 白沢遺跡
43. 徳丹城跡
45. 稲村遺跡
46. 杉ノ上Ⅱ遺跡
47. 上平沢新田遺跡
48. 比爪館遺跡
49. 大地渡遺跡
50. 上台遺跡
51. 南万丁目遺跡
52. 古館遺跡
53. 熊堂古墳
54. 長沼古墳
55. 岩崎城跡
56. 蔵屋敷遺跡
57. 高畑遺跡
58. 塚遺跡
59. 江釣子古墳群
60. 尻引遺跡
61. 国見山廃寺跡
62. 鬼柳西裏遺跡
63. 相去遺跡
64. 五十瀬神社前遺跡
65. 瀬谷子窯跡群
66. 水口沢古墳
67. 上耕田遺跡
68. 西根縦街道古墳
69. 道場古墳
70. 西根遺跡
71. 玉貫遺跡
72. 今泉遺跡
73. 膳性遺跡
74. 胆沢城跡
75. 宮地遺跡
76. 落合遺跡
77. 力石Ⅱ遺跡
78. 林前遺跡
79. 石田遺跡
80. 見分森古墳
81. 二本木遺跡
82. 見分森遺跡
83. 明後沢遺跡
84. 長者原遺跡
85. 中尊寺
86. 無量光院跡
87. 毛越寺
88. 柳の御所跡
89. 泥田廃寺跡
90. 機織山Ⅰ遺跡
91. 杉山古墳
92. 高瀬Ⅱ遺跡
93. 蓬田遺跡
94. 千徳城遺跡群
95. 青猿Ⅰ遺跡
96. 上村遺跡
97. 赤前遺跡群
98. 払川Ⅰ遺跡
99. 夏本遺跡
100. 殿位古墳
101. 名高根遺跡
二戸市
久慈市
盛岡市
宮古市
花巻市
北上市
釜石市
江刺市
水沢市
大船渡市
陸前高田市
一関市
馬渕川
新井田川
久慈川
安家川
丹藤川
北上川
小本川
閉伊川
津軽石川
大槌川
雫石川
猿ヶ石川
和賀川
胆沢川
盛川
気仙川
0
1:1050000
25km

第1図 位 置 図

大起伏山地　山麓地及び他の緩斜面　扇状地

中起伏山地　丘陵地　谷底平野及び氾濫平野

小起伏山地　砂礫段丘　C　人工改変地

0　1：50000　5000m

第2図　地形分類図

第3図　青猿1遺跡と周辺地形図

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

宮古市は、岩手県沿岸のほぼ中央部に位置し北緯39°29'49"～39°43'23"、東経141°45'20"～142°04'44"までを市域とし、総面積338.64㎢をはかる。

地形的には、津軽石川から宮古湾の西縁沿いを走向する津軽石断層帯を境に、西部の北上山地から続く中、小起状の山地帯、その縁辺部に形成された丘陵部と東部の重茂半島域に大きく2分され、閉伊川、津軽石川の河口やその各支流域に形成された平坦部に分けられる。平坦部は、すでに市街地や住宅地となっており平坦部に接する丘陵部を削り平坦部を作り出す造成工事が増加している。

閉伊川

遺跡は、わずかに残った平坦部や丘陵部の尾根や緩斜面に立地するものが多い。

今回発掘調査を行なった、青猿Ⅰ遺跡、千徳城遺跡群はともに、北上山系から続く大・中起伏山地が標高200m付近となる小起伏山地（黒森山山地帯）の縁辺部をとりまく様に形成された丘陵部（千徳丘陵）に立地する。

千徳丘陵

千徳丘陵は、閉伊川により南・北に2分されており更に、閉伊川に注ぐ山口川、近内川や小河川、沢筋などによる開析が著しく、その平面形態は、樹枝状を呈し複雑に入り組んだものとなっている。

青猿Ⅰ遺跡

青猿Ⅰ遺跡は、千徳丘陵のうち閉伊川の北側丘陵上にある。北側丘陵は更に、山口川、近内川により大きく3分されており、本遺跡は、このうちのほぼ中央部に位置し周辺部に存在する遺跡とともに「長根・泉町・鴨崎遺跡群」を形成している。青猿Ⅰ遺跡は、この遺跡群中、最も西側にあり背後には黒森山山地が接続する。

「長根・泉町・鴨崎遺跡群」

この遺跡群を含む一帯は、既述の通り宮古市内でも最も宅地化の著しい地区のひとつで、ほぼ毎年の様に緊急の発掘調査がなされている。それらの概要は、以下の通りである。

遺跡名	調査年	調査担当者	調査理由	検出遺構・遺物等	調査報告書等
泉町狐崎Ⅱ	昭56(1981)	武田将男	宅地造成	奈良・平安時代竪穴式住居跡、縄文時代後期遺物包含層等	未報告
青猿Ⅱ	昭59(1984)	武田将男	宅地造成	平安時代竪穴式住居跡、土坑跡等	未報告
狐崎	昭60(1985)	武田将男	宅地造成	縄文時代土器、石器等	未報告（試掘調査）
青猿Ⅰ	昭62(1987)	鎌田祐二他	宅地造成	平安時代竪穴住居跡、鉄関連遺構（炉跡）、縄文時代陥し穴遺構等	『青猿Ⅰ、千在家Ⅱ、堀合館』（1988.3.宮古市教委）
泉町狐崎Ⅱ	昭63(1988)	鎌田祐二他	宅地造成	縄文時代竪穴住居跡、土坑跡、平安時代竪穴住居跡等	『狐崎Ⅱ　88』（1989.3.宮古市教委）
長根Ⅰ	昭63(1989)	玉川英喜 光井文行	宅地造成	古墳群（奈良時代末～平安）、中世墓坑跡、縄文弥生土器、わらび手刀、和同開弥等	『長根Ⅰ』（1990.3.財岩手県埋蔵文化財センター）
狐崎	平元(1989)	盛合義信他	宅地造成	弥生時代竪穴住居跡、奈良時代竪穴住居跡、土師器他	『狐崎　89』（1990.3.宮古市教委）
青猿Ⅰ	平元(1989)	鎌田祐二他	宅地造成	平安時代竪穴住居跡、土坑跡、土師器、縄文時代土器他	本報告書
青猿Ⅰ	平元(1989)	鎌田祐二他	宅地造成	平安時代土坑跡、土師器等	本報告書

以上の様に、今までの調査では、縄文時代から中・近世に至るまでの遺構・遺物が確認され

ているが、遺跡の立地する尾根においては、比較的標高の高くなる尾根の基部や接続点の方には、縄文時代の遺構が存在するようである。そして、尾根の先端部の方には奈良・平安時代の遺構があり、縄文時代と古代期の立地条件が異なる傾向がみられる様である。

青猿Ⅰ遺跡では昭和62年（1987）の調査では、平安時代の竪穴住居跡の他、炉本体部と方形の平場（竪穴）、廃滓捨て場から成る鉄（製鉄？）に関連した遺構を検出している。また、長根Ⅰ遺跡からは、岩手県沿岸では初め調査された終末期の群集墳、狐崎遺跡では弥生時代の竪穴住居跡や奈良時代の竪穴住居跡が調査されており、『長根・泉町・鴨崎遺跡群』は、内容的にも各時代にわたりバラエティに富んだものとなっている。

千徳遺跡群

千徳遺跡群は、千徳丘陵のうち閉伊川の北側の大きく３分された丘陵のうち西側の丘陵部に立地している。北側を黒森山山地に源を発する近内川、西側を神田沢、そして南東側を閉伊川で囲まれた島状の独立した丘陵となっている。

当遺跡群内の中心をなすのは、千徳城だがその他に千徳古城、堀合館（いずれも千徳城以前のものと考えられている）の中世城館跡がある。また、丘陵の尾根部を中心に縄文時代から平安時代の遺跡が分布する。

今回調査した地点は、千徳城遺跡群の中でも最も北西部にあたる。当遺跡群の西側には市内でも大規模な団地（西ヶ丘団地）が在り、近年、この西側からの宅地造成のための切り崩しが見られ、その一部は、すでに千徳城の縄ばり内にも及んでいる。なお、西ヶ丘団地造成の際には事前に昭和54年（1979）に発掘調査が実施されている（註）。それによれば、発見された遺構は、平安時代の竪穴住居跡１棟、中世後期の砂鉄製錬炉及び鍛冶炉と考えられる遺構を検出していおり、古代から中世にかけての生活の場であった。そして、中世後期の遺構は、千徳城との関わりも考えている、とある。

堀合館

また、昭和62（1987）年には、当遺跡群内の南西部に位置する堀合館の一部が墓地造成に係る事前の発掘調査が実施されており、館の時期に伴うと考えられる段状遺構や整地地業跡などが調査されている。

（註）『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』1980年３月　宮古市教育委員会

第4図　千徳城遺跡群と周辺地形図

青猿Ⅰ遺跡

Ⅲ　青猿Ⅰ遺跡

1　調査の経過

調査は、平成元年（1989）と２年（1990）の２ヶ年に分けて実施した。

調査の方法は、調査対象区のうち遺構が存在すると考えられる地区にトレンチを設定し遺構の有無を確認した。その際、以前の調査（昭和62（1987）年）結果を考慮し尾根部や緩斜面部以外の洞部にもトレンチを設定した。また、Ⅰ区の緩斜面部は、ほぼ全域の表土を剥ぎ竪穴住居跡などの存在を確認した。

調査座標は、平成元年の調査では地形にあわせた任意のものを設定したが、次年度の調査では平面直角座標第Ⅹ系に基づき座標軸を設定し調査にあたった。そして、整理作業の段階で平成元年調査の図面等を整合した。

2　調査の概要

発掘調査対象面積　7435㎡

発掘調査期間　平成元年６月23日～８月９日

平成２年４月５日～４月25日

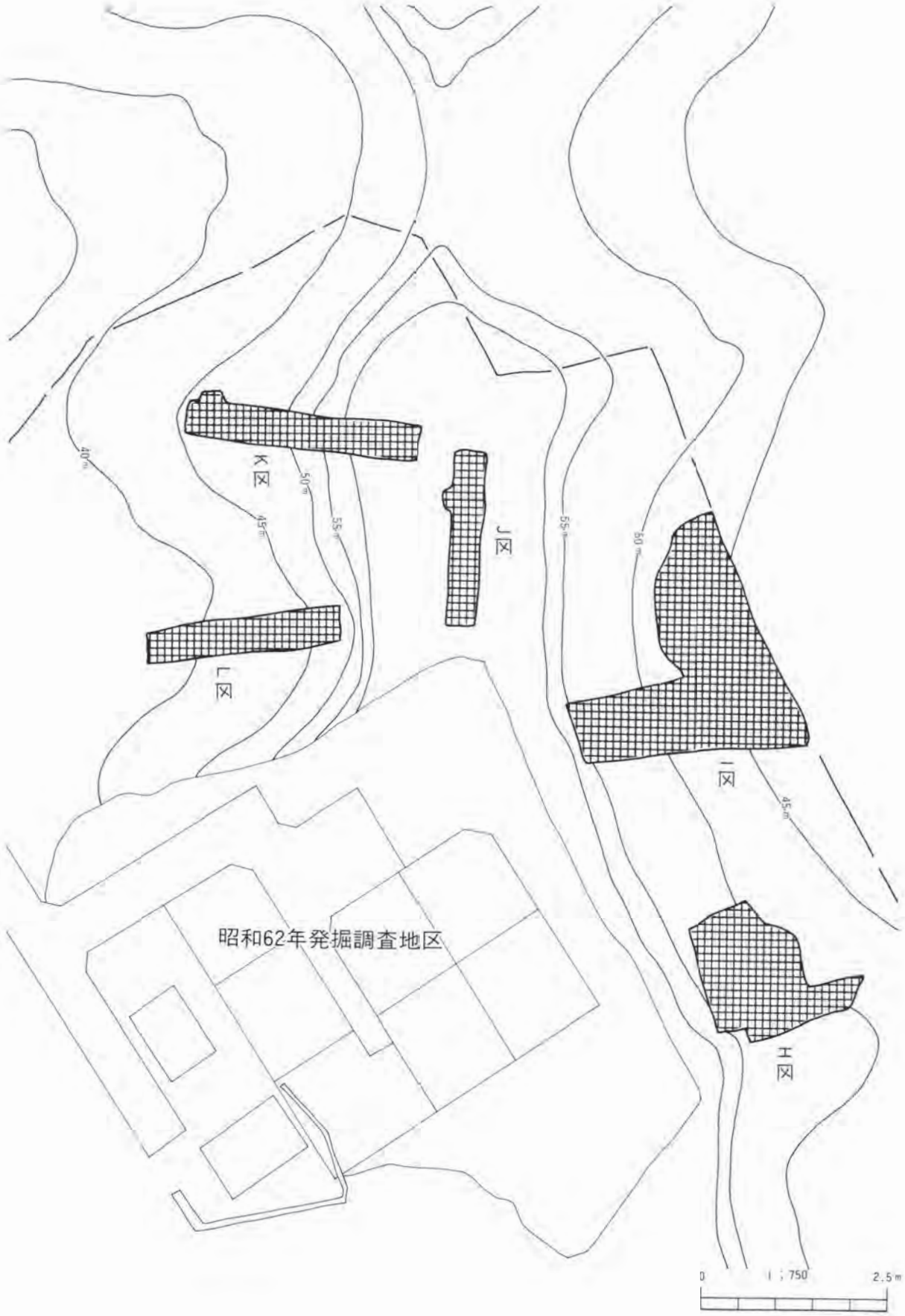
検出遺構　平成時代の竪穴住居跡３棟のほか、カマド跡や柱穴跡が存在せず平面形態的にも３棟の竪穴住居跡と異なる竪穴状遺構３棟、土坑跡４基を検出した。土坑跡４基のうち２基からは全く遺物を検出しなかったが、残り２基からは土師器の破片が出土している。

検出遺構

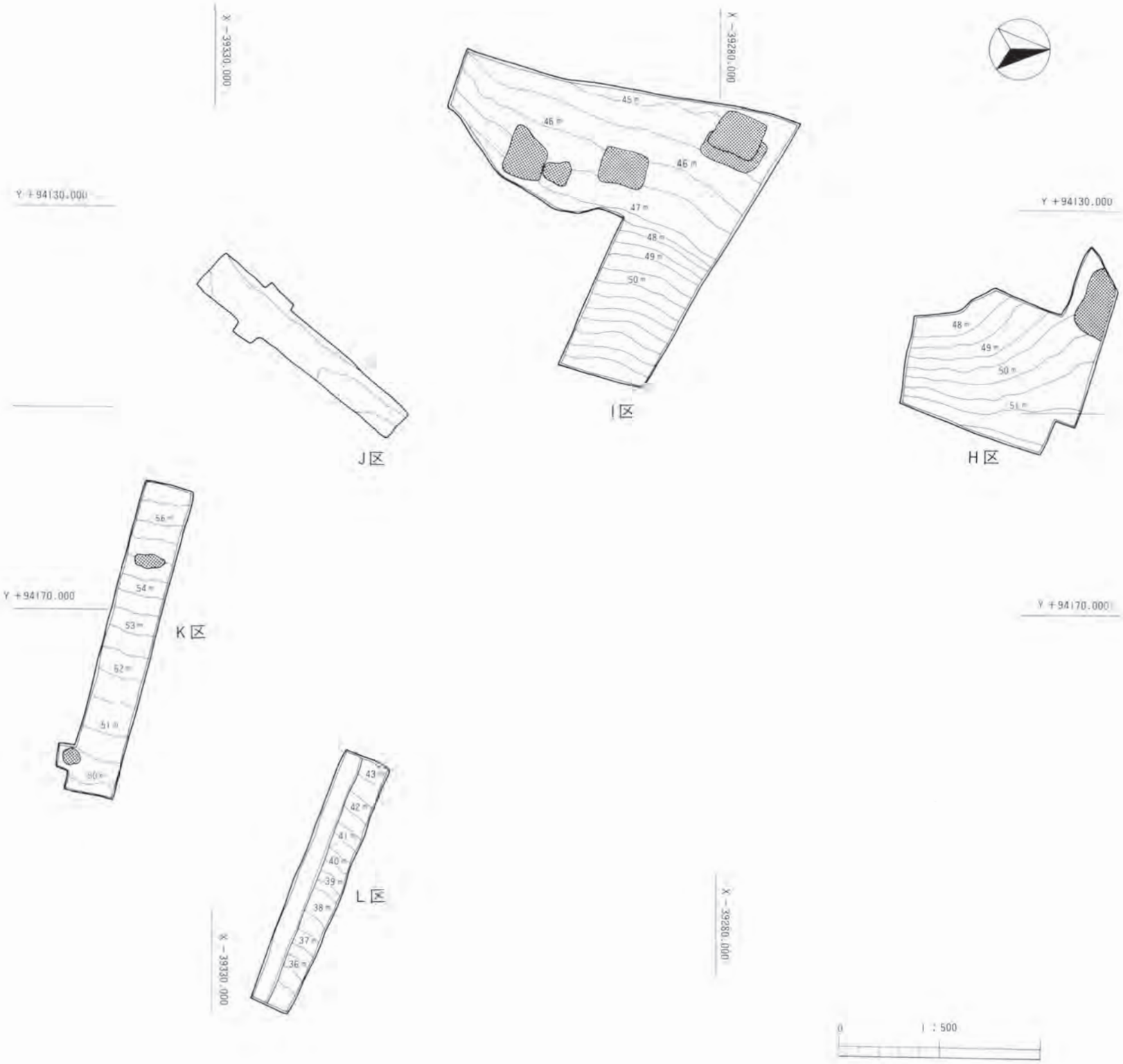
検出遺物　竪穴住居跡を中心に平安時代の土師器が出土した。また、鉄滓やフイゴの羽口鉄製品が少量ながら出土している。

検出遺物

深掘りしたトレンチ内からは、極わずかながら縄文時代の土器片が出土しているが、いずれも地文のみで図化できなかった。



第5図　青猿Ⅰ遺跡調査位置図



第6図　青猿I遺跡調査区全体図

3　調査内容

第１号竪穴住居跡（第７、８図）

調査対象区内で一番北側に位置する尾根上（H区）に位置する。遺構のおよそ北半分が調査対象区外のため精査できず、カマド跡の有無を確認できなかったが、平面形態が他の２棟の竪穴住居跡と類似することから竪穴住居跡とした。

平面形は、ほぼ方形～長方形状を呈するものと考えられる。全体の規模などは不明である。　**平面形**

壁は、東壁から南壁の一部にかけてしか残存していなかったが、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、床面から最大部で0.2ｍはかる。

埋土は、A層から成りA$_1$、A$_2$層に細分される。A$_1$層は、やや砂っぽい褐色土を基本土とするやわらかくしまりのないもので、暗褐色土や黄褐色土の混入が認められる。A$_2$層は、やや明るい褐色土を基本土とするもので、塊粒状に黄褐色土が多く混入する。　**埋土**

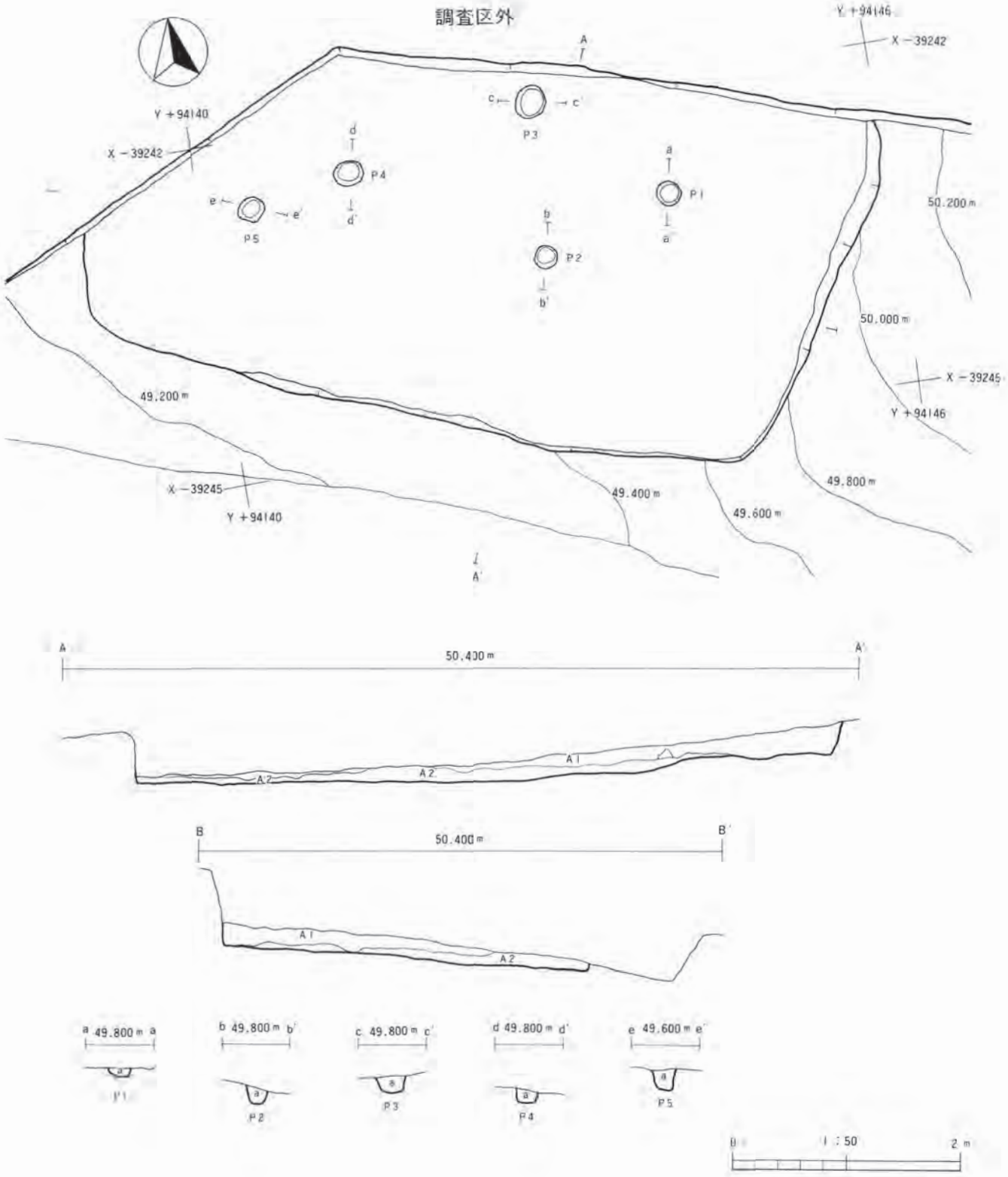
床面は、花崗岩の地山面をそのまま利用しており平坦であまり固くしまっていない。　**床面**

柱穴状の小ピットは、P$_1$～P$_5$までを検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。平面形は、すべて円形状を呈するもので規模的にも直径が0.2～0.3ｍ前後の小規模なものである。床面からの深さは、P$_1$が0.07ｍ、P$_2$、P$_3$が0.15ｍ、P$_4$が0.12ｍ、P$_5$が0.2ｍをはかる。竪穴の全容が不明なため、具体的な配置等は不明である。

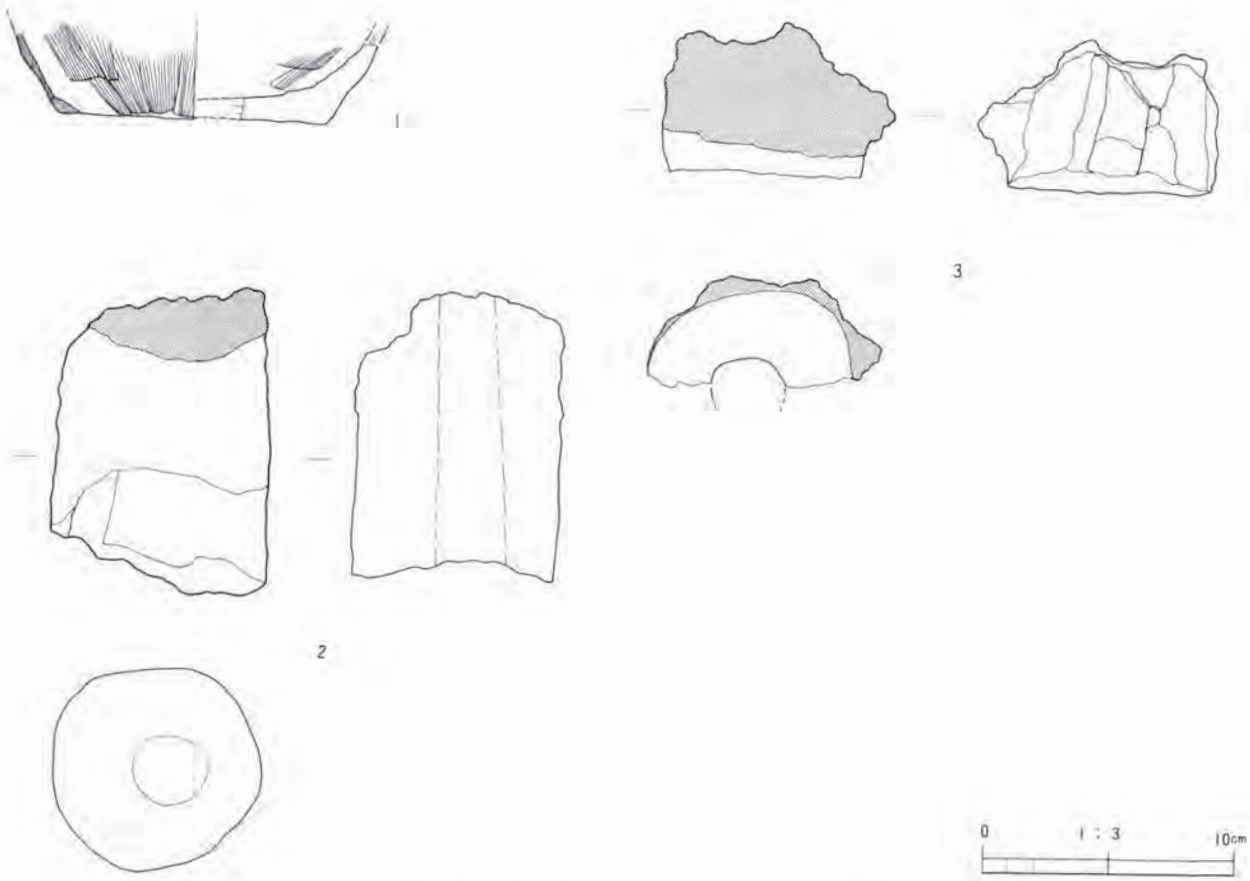
当住居跡から出土した遺物は、量的には少なく小破片が中心である。

第10図１は、甕の底部片で推定で底径10.6㎝をはかるものである。底部から体部にかけては張り出さず素直に立ちあがり、底面はほぼ平坦である。体部外面は、強めのヘラナデ調整を施しておりやや深い条痕が観察される。内面は、外面同様強めのヘラナデ調整が施されている。焼成は良好で胎土には小石粒を多く含んでいる。　**遺物**

第８図２、３は、フイゴの羽口片でどちらも先端部の破片である。２は、円筒状の形状をとどめており、残存長で11.4㎝、円筒の外周で8.3㎝、内径で3.0㎝をはかる。先端部には、溶解した金属や炭化物粒や焼土が付着している。３は、先端部の破片で残存長6.0㎝をはかるもの。推定で外径8.0㎝、内径3.0㎝をはかる。先端には多量の溶けて固まった金属が付着しており、強い燃焼を受けた様である。



第7図　第1号竪穴住居跡



第８図　第１号竪穴住居跡出土遺物

第１号竪穴遺構（第９図）

緩斜面部の調査区（Ⅰ区）の北西部側に位置し、第２号竪穴住居跡と重複するが、これよりも新しい時期のものである。

平面形は、だ円形状を呈する。規模は、長軸で5.3m、短軸で2.8mをはかる。壁は、床面から垂直に立ちあがる。壁高は、東壁側で0.15mを残す。　**平面形**

埋土は、明るい褐色土を基本土とするものでやや固く中程度のしまりである。暗褐色土を塊状に多く混入し、花崗岩の風化した真砂土塊が多く含まれる。　**埋土**

床面は、第２号竪穴住居跡と重複していない部分では地山面をそのまま利用しているが、重複部分では、貼床等は認められず第２号竪穴住居跡の埋土面のままであるが、比較的固くしまっている。床面上には、柱穴等のピット類や施設は何も確認されなかった。　**床面**

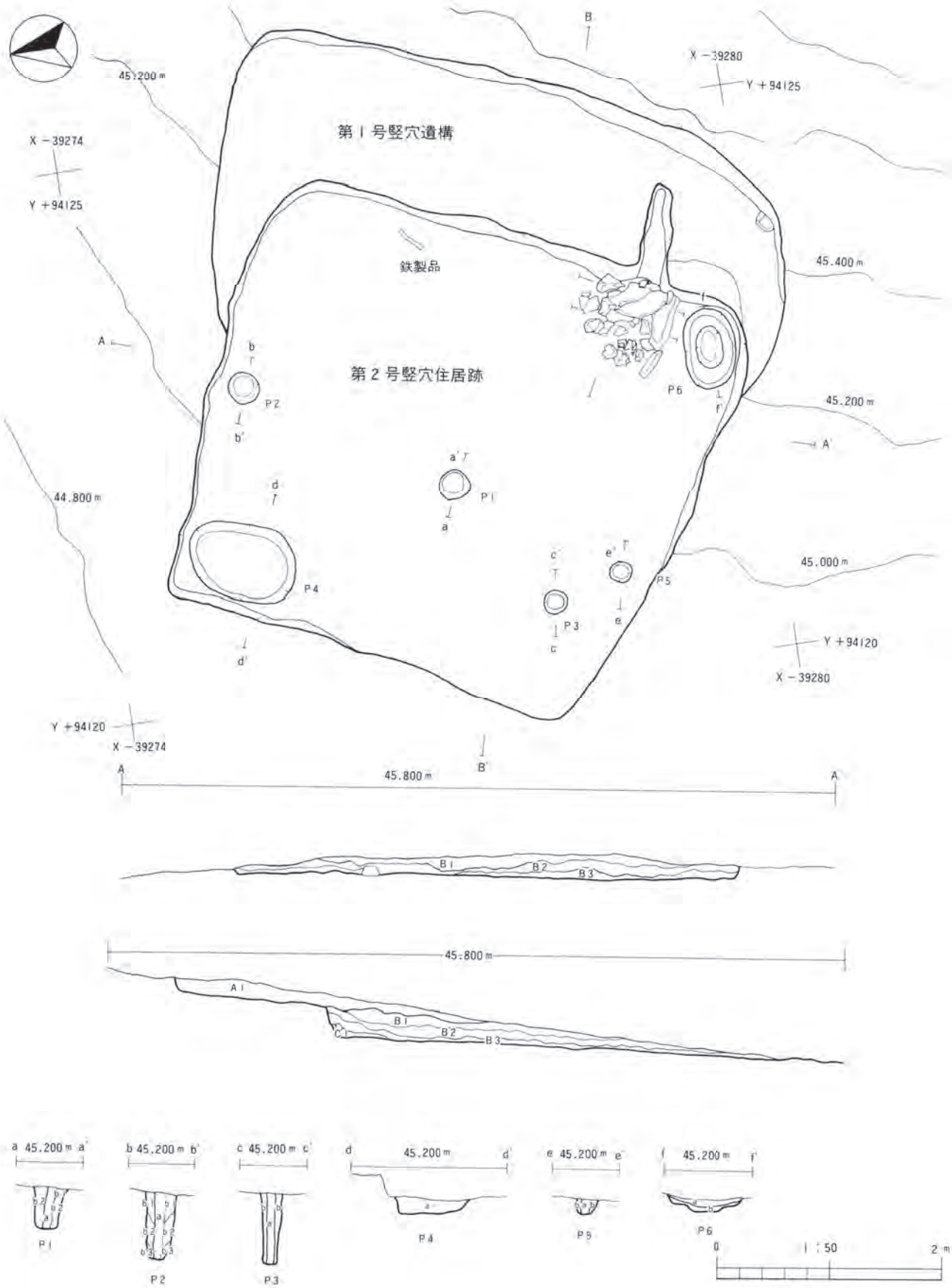
当竪穴から遺物は出土しなかった。

第２号竪穴住居跡（第９～11図）

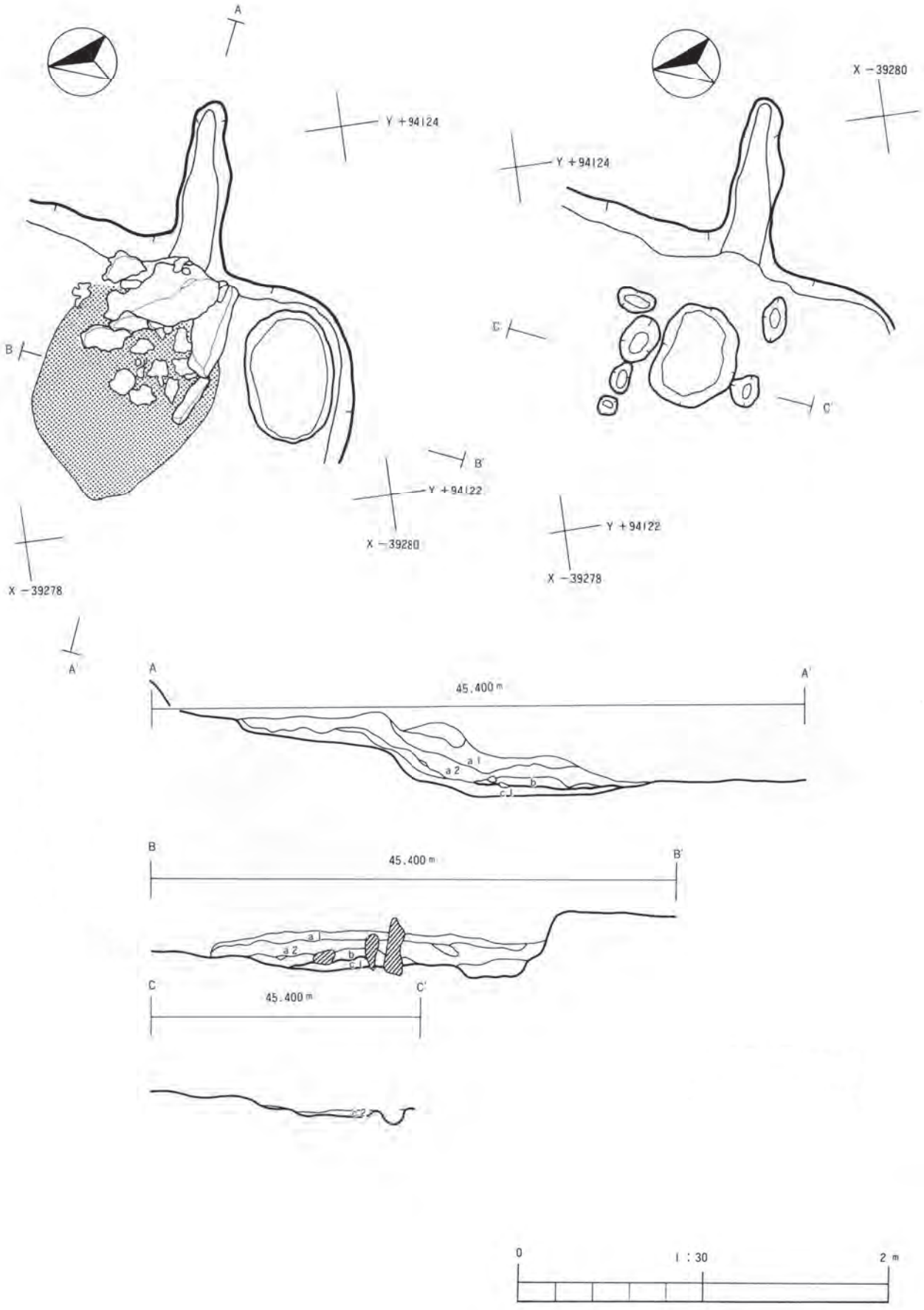
第１号竪穴遺構に重複するが、これよりも古い時期のものである。

平面形は、南西側の壁が検出できなかったが、他の３隅の状況からほぼ方形を呈するものである。東壁の南側にカマド施設が設けられている。　**平面形**

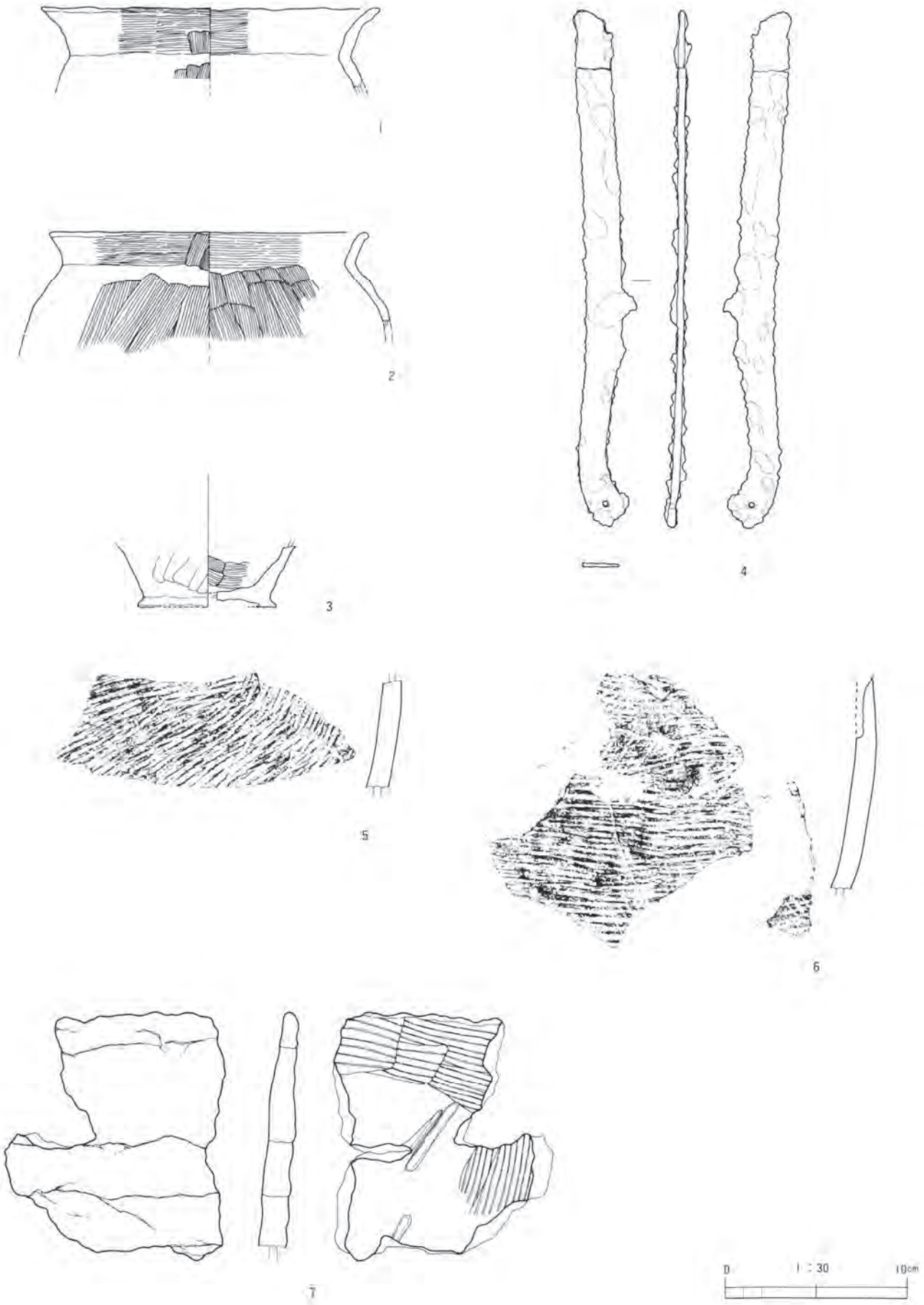
規模は、長軸4.5m、短軸4.0mをはかる。壁は、床面からほぼ垂直に立ちあがり壁高は床面　**規模**



第9図　第2号竪穴住居跡



第10図　第12号竪穴住居跡カマド跡



第11図　第2号竪穴住居跡出土遺物

より最大で0.4mをはかる。

埋土

埋土は、B層・C層に分けられる。B層は、黒褐色土を基本土とするものでB$_1$～B$_3$層に細分される。B$_1$層は、褐色土が小塊から粒状に多く混入する。第1号竪穴遺構の床面として使用されており、比較的固くしまっている。B$_2$層は、やや明るい黒褐色土を基本土とするもの。B$_3$層は、やわらかい黒色土を塊状に混入し炭化物粒子も比較的多く含む。固さ・しまりとも中程度でB$_1$、B$_2$層程度の固さ・しまりはない。C層は、竪穴の東壁際にのみ堆積が認められたもので、明るい褐色の砂質の強い土を基本土とする。黒褐色から暗褐色土が少量ながら混入する。固さ・しまりともに欠き、土器等の遺物は含まない。

床面

カマド

床面は、地山面をそのまま利用しており平坦で固い。

カマドは、東南側に存在し大～中礫（ほとんどが花崗岩）を利用して構築されたものである。袖部には、扁平な礫を立て並べて芯材としており天井部にも扁平な礫を横かけていたものと考えられる。礫自体は、かなり焼成作用を受けもろくなっている。燃焼部は、幾分掘りくぼめられておりカマド支脚礫の最前列付近に形成されており、比較的良く焼けており焼土の浸透層が認められた。煙道部は、住居外東方向に0.85m程度のびており上り傾斜となっている。

柱穴

カマドの崩壊土は、3層に細分できb層が焼土層で多量の焼土、炭化物粒子を含む。b層とc層の層理面が燃焼面となっている。

遺物

柱穴は、P$_1$～P$_4$を検出した。いずれも柱痕跡が確認したが、規模的には直径0.3m前後の小規模なものである。P$_2$、P$_4$は、床面からの深さ0.65mをはかる深いものである。

遺物は、今回検出、精査した遺構の中では一番多く出土した。大方が、カマド跡付近の崩壊土、床面上のものである。出土遺物の大半は、土師器であるが、小破片が中心で図化できたのは第11図である。1と2は、土師器の甕の口縁部～肩部の破片。いずれも口縁部が短かく外反するもので、器外面には、強いヘラナデ調整が施されている。2は内面にも強いヘラナデ調整がみられる。2は、胴部が口縁部より大きく膨らむものである。3は、甕の底部片で外面にはヘラナデ、内面には、かるい刷毛目調整が施されている。また、外面には部分的に炭化物が付着している。1～3の土師器片は、いずれも焼成が良好でかたくしまっているが、胎土中に大きめな小石状のものを多量に含むものである。

4は、名称・用途とも不明な鉄製品である。全長28.5cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmをはかるものである。一方の先端部が丸みを帯び直径0.3cmの貫通孔があく。一見して刀子と思われるが、横断面をみても明確な刃部が認められない。

5は、須恵器の甕の体部片である。外面にはたたき目痕がみられるが、内面には認められない。

6は、外面に輪積み痕が顕著なものである。内面の口縁部に刷毛目痕が観察される。口縁部になる程、うすくなりほぼ直線的な器形となるものと思われる。

また、図示できなかったが土師器の坏片が少量出土している。ロクロ成形で内面黒色処理を施したものやヘラナデ調整のみられるものがある。

第３号竪穴住居跡（第12、13図）

緩斜面部の調査区（Ｉ区）の中央部斜面際に位置する。

平面形　平面形は、長方形を呈する。規模は、長軸4.75ｍ、短軸3.55ｍをはかる。壁は、東壁側がややゆるやかな傾斜で北壁・南壁側は、ほぼ垂直に立ちあがる。壁高は、東壁側で0.6ｍを残す。

埋土　埋土は、Ａ層、Ｂ層、Ｃ層に大別される。Ａ層は、竪穴上部のほぼ全域を覆うもので暗褐色土を基本土とするものである。A_1層、A_2層に細分される。A_2層は、基本土がやや明るく黄褐色土を塊粒状に混入し、土器細片や炭化物粒子が含まれる。Ｂ層は、竪穴床面中央部に広く堆積する。やや明るい黒褐色土を基本土とするもので、炭化物粒子が認められる。固さ・しまりとも中程度である。Ｃ層は、西壁側を除く各壁際にのみ堆積が認められるもので、褐色の砂質土を基本土とする。固さ・しまりとも欠く。

床面　床面は、ほぼ平坦で地山面をそのまま利用している。

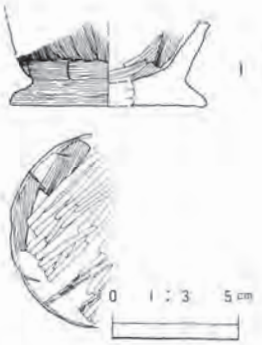
柱穴状のピットは、P_1～P_4を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。規模的には、P_1が直径0.35ｍ、P_2～P_4が0.2ｍ前後で円形ないしは楕円形プランを呈するものである。床面からの深さはP_1が0.1ｍ、P_2が0.2ｍ、P_3とP_4が0.3ｍをはかる。

南壁側に幅0.25ｍをはかる周溝状のおち込みを検出したが、深さ0.05ｍと浅いものである。

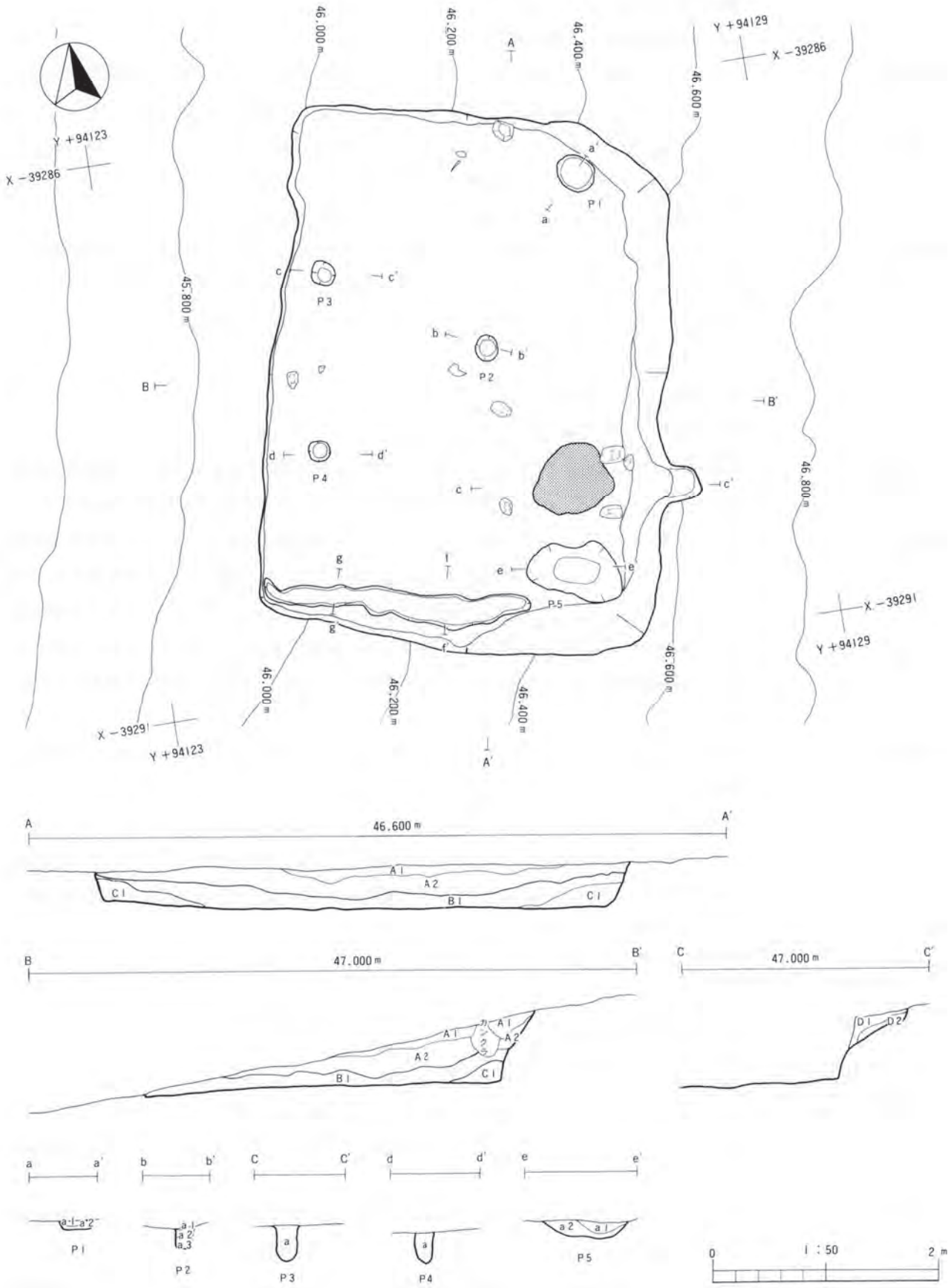
カマド　カマド跡は、東壁の南側に存在するが、袖部に相当する箇所にあまり大きくない長方形状の花崗岩礫が認められる程度である。その２個の礫から住居内側に0.75×0.65ｍの範囲で焼土・炭化物粒の広がりを検出したが、これが燃焼部に相当するものと思われるが、あまり焼けておらず焼土の浸透層も確認できなかった。煙道部は、住居外東方向に僅かに0.3ｍ程しか確認できなかった。煙道底面は、Ｕ字形呈しほぼ平坦に続くが東側に傾斜上がる。

カマドの南脇にP_5を検出した。0.85×0.5ｍ規模の不整楕円形プランを呈するもので、床面からの深さ0.15ｍの浅い皿状のピットである。埋土は、黒褐色土を基本土とするａ層から成りa_1、a_2層に細別される。a_1層は、若干粘性があり褐色の粘質土塊が混入する。炭化物粒子が多量に含まれている。a_2層は、黄褐色の砂質土塊が混入するが炭化物粒子の混入は少ない。a_1、a_2とも固さ・しまりは中程度である。

遺物　遺物は、Ａ層を中心に出土しているが、量的には多くない。図化できたのは第12図の甕の底部片だけである。推定底径7.8cmをはかるもので、底部が張り出す。体部内外面とも強いヘラナデ調整が施こされており、底部の張り出し部は指ナデにより整形される。底面は、ヘラナデ後に強いヘラミガキによりほぼ平坦面となっている。焼成は非常に良好で固くしまっている。胎土中には、小石状のものが多量に含まれている。



第12図　第３号竪穴住居跡出土遺物



第13図　第3号竪穴住居跡

第２号竪穴遺構（第14、15図）

第３号竪穴住居跡の南側に位置する。

平面形　平面形は、不整形である。規模は、長軸2.7m、短軸2.0mをはかる。壁は、北壁側が垂直に立ち上がるほかは、ややゆるやかな傾斜となる。壁高は、北壁側で0.35mを残す。

埋土　埋土は、黒褐色土を基本土とするものでA$_1$層、A$_2$層に細分される。A$_1$層は、やや暗い土で比較的固くしまっており、炭化物粒子・焼土粒を含む。A$_2$層は、A$_1$層よりは明るい土で黄褐色土を塊粒状に多く混入する。固さ・しまりともにA$_1$層程でない。

床面　床面は、地山面をそのまま利用しており固いが、凹凸がみられ南から北側方向へゆるやかに傾斜している。床面上では、柱穴などのピットは確認されなかった。

遺物は、土師器片が極く、少量出土しているが図示できるものはない。

第３号竪穴遺構（第14図）

第２号竪穴遺構の南側に南接するように位置する。

平面形　平面形は、西壁が確認できず不明確だが、ほぼ楕円形状を呈するものである。規模は、長軸5.3m以上、短軸5.2mをはかる。壁は、ほぼ垂直に立ちあがり壁高は最大部で0.15mを残す。

埋土　埋土は、A層、B層、C層に大別される。A層は、南壁側に堆積するもので、暗褐色土を基本土とする。固さ・しまりとも中程度である。B層は、竪穴の床面のほぼ全域を覆うものでB$_1$、B$_2$層に細別される。B$_1$層は、黒褐色土を基本土とするもので固さ・しまりとも中程度である。B$_2$層は、やや明るい黒褐色土を基本土とし黄褐色土を塊状に混入するもので固さ・しまりとも中程度である。C層は、東壁際にのみ堆積するもので褐色の砂質土を基本土とする。固さ・しまりとも欠く。

床面　床面は、地山面をそのまま利用しており床面自体は平坦面である。東側から西側へ斜面なりに傾斜する。

柱穴状のピットは、P$_1$～P$_{18}$まで検出した。このうち柱痕跡の確認できたのは、P$_1$、P$_2$、P$_{10}$、P$_{11}$、P$_{12}$だけである。P$_5$、P$_7$以外は、直径0.3m内外の小規模なピットである。床面からの深さも0.15m前後のものが大半だが、P$_1$が0.65m、P$_2$とP$_{12}$が0.4m、P$_{13}$が0.55mと深くなる。柱穴の配置などは不明である。

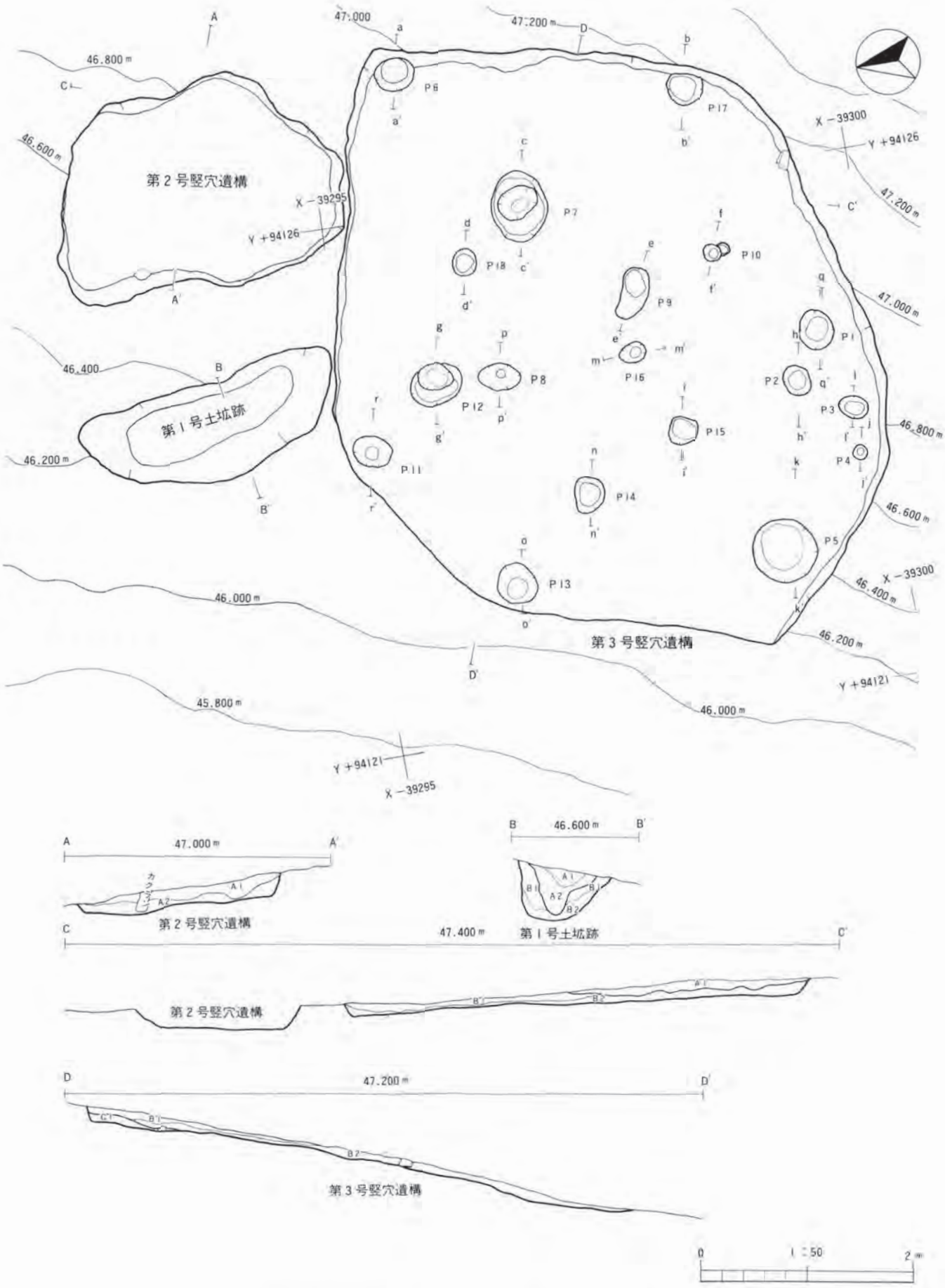
遺物は、少量ながら出土しているがいずれも小破片のため図示できなかった。

第１号土坑跡（第14図）

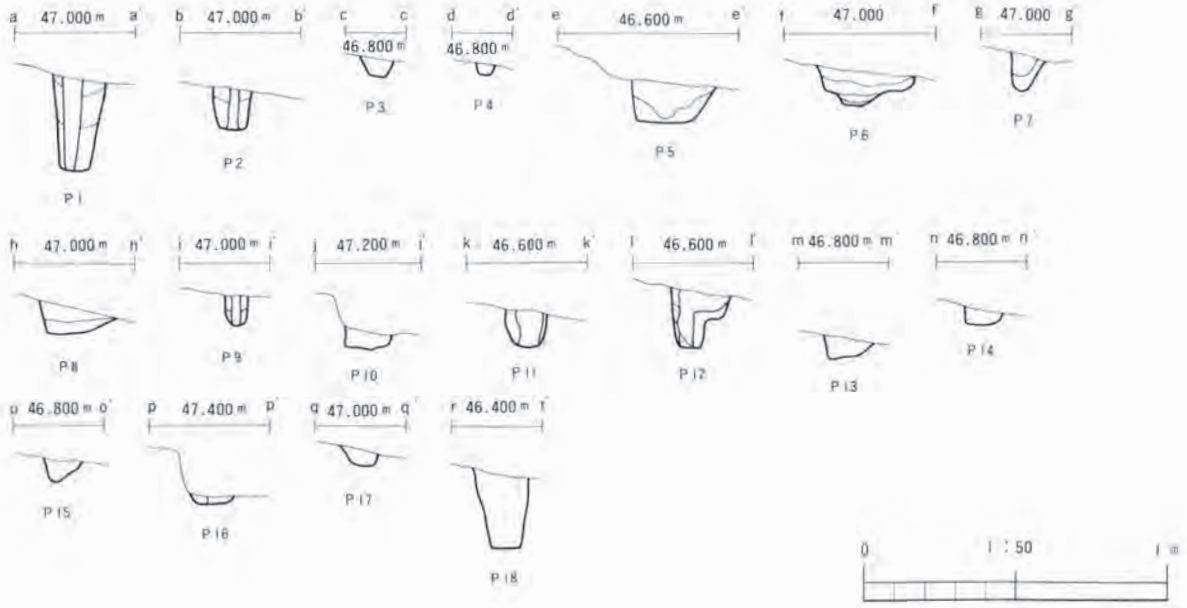
第２号・３号竪穴遺構に隣接して位置する。

平面形　平面形は、長楕円形状を呈するが不整気味である。規模は、長軸で2.5m、短軸で0.95mで検出面からの深さ0.5mをはかる。壁は、東壁側がやや垂直に立ちあがるが、その他は比較的ゆるやかとなる。

埋土　埋土は、A層、B層に大別される。A層は、土坑の中央部に堆積するものでA$_1$、A$_2$層に細分される。A$_1$層は、にぶい褐色土を基本土とするもので比較的固くしまっている。A$_2$層は、褐色土を基本土とするもので、黄褐色の粘質土を塊状に混入する。固さ・しまりともに中程度である。B層は、壁際から底面にかけて堆積するもので明るく褐色土を基本土とする。B$_1$、



第14図　第2号・3号竪穴遺構、第1号土坑跡



第15図　第3号竪穴遺構床面ピット断面

B_2層に細分されるが、B_2層には多量の黄褐色の粘質土が混入する。固さ・しまりともに全くないが、B_2層の方がよりその度合が強い。

底面自体は、ほぼ平坦面だが、南から北側へゆるやかな傾斜をもつ。

遺物は、A_2層の下部を中心に出土したが、量的には少ない。

第２号土坑跡（第16図）

尾根上の調査区（K区）に位置する。

平面形は、長方形状を呈する。規模は，長軸2.7m、短軸1.2mで、検出面からの深さは，0.45mをはかる。壁は、ややゆるやかな傾斜で立ちあがる。 **平面形**

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、にぶい褐色土を基本土とするものでA$_1$、A$_2$層に細分される。A$_1$層は、やや暗い土で黄褐色土や黒色土が混入する。A$_2$層は、A$_1$層より幾分明るい土となる。A$_1$、A$_2$層ともに中程度の固さ・しまりである。B層は、やや粘性のある黒褐色土を基本土とするもので固さ・しまりともに中程度である。 **埋土**

底面は、ほぼ平坦面である。 **底面**

遺物は、全く出土しなかった。

第３号土坑跡（第16図）

尾根上の調査区（K区）に位置し、第２号土坑跡の東側に検出した。

平面形は、細長い楕円形状を呈するもので、規模は、長軸1.85m、短軸0.5mをはかる。壁は、南壁側はほぼ垂直だがそれ以外の壁は、ゆるやかな傾斜で立ちあがり東壁側では底面との差がほとんどなくなる。検出面からの深さは、0.45mをはかる。 **平面形**

埋土は、A層、B層に大別される。A層は、褐色土を基本土とする比較的固くしまったもので、黄褐色土塊の混入しないA$_1$層と混入するA$_2$層に細分される。B層は、やや明るい黒褐色土を基本土とするもので量的には多くないが、黄褐色の粘質土を粒塊状に混入する。固さ・しまりともに中程度である。 **埋土**

底面は、多少凸凹がみられるがほぼ平坦な面である。 **底面**

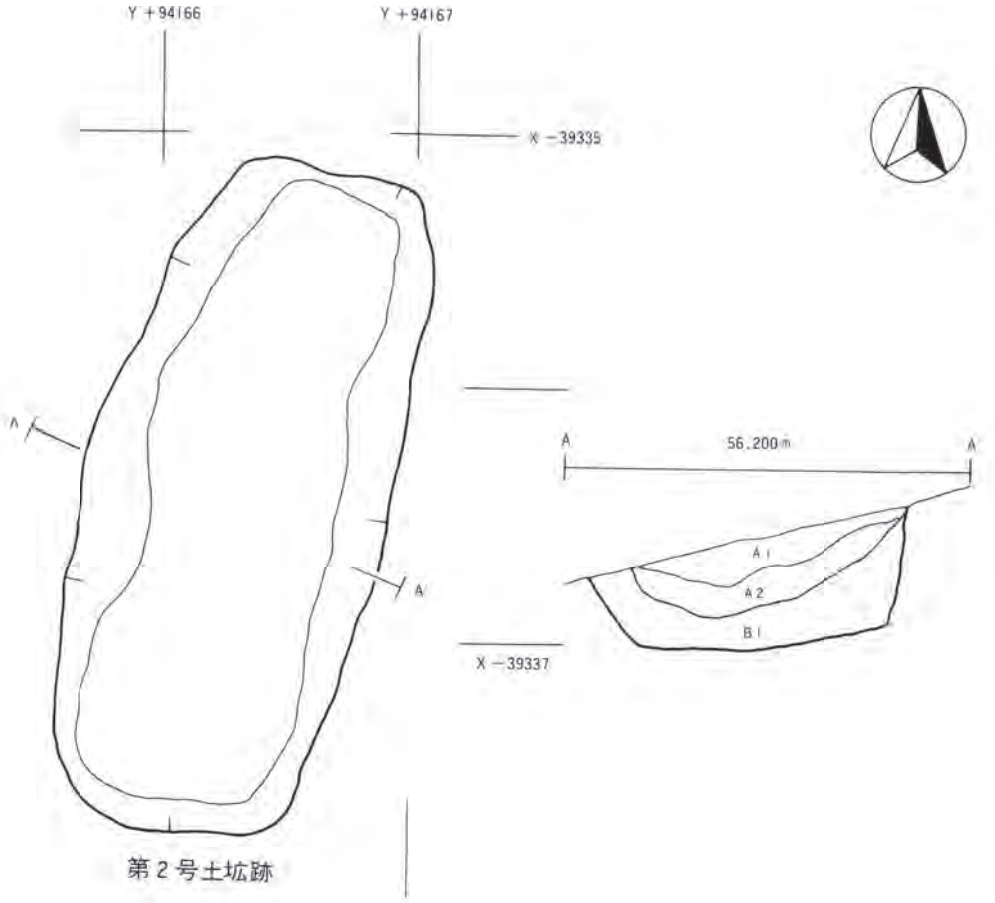
遺物は、全く出土しなかった。

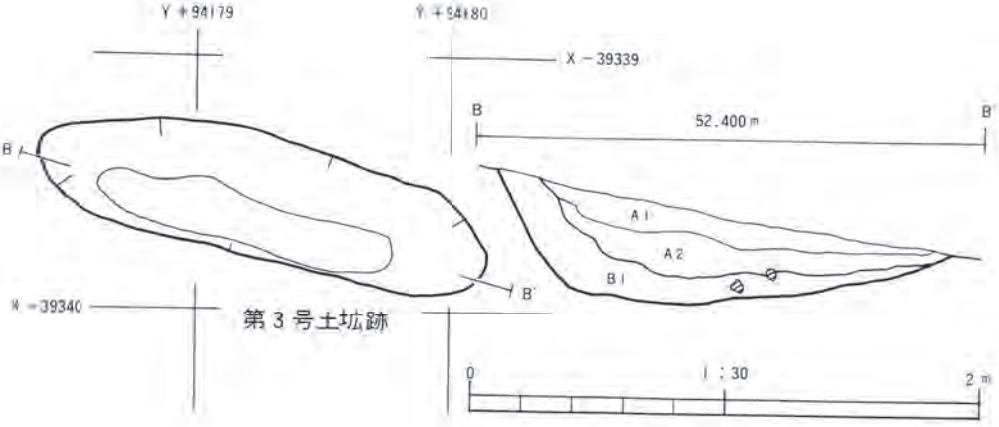
第４号土坑跡（第17図）

調査区K区の尾根の先端部付近に位置する。

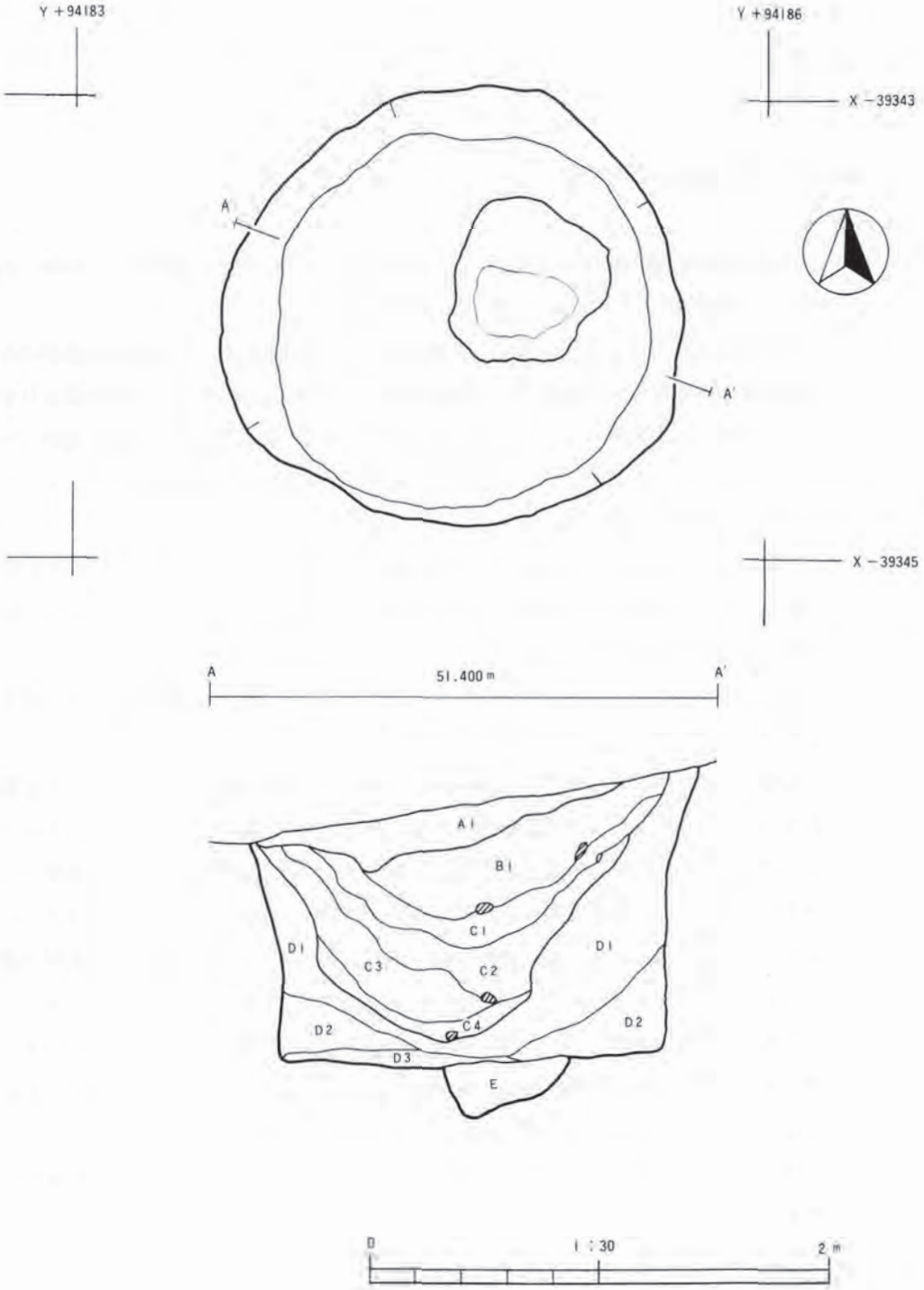
平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、直径2.0mで検出面からの深さは、最深部で1.35mをはかる。壁は、垂直に立ちあがる。 **平面形**

埋土は、A～E層に大別される。A層は、黒褐色土を基本土とするものでにぶい褐色土が混入する。固さ・しまりとも中程度である。B層は、やや明るい褐色土を基本土とするもので比較的多く黒褐色土が混入する。C層は、C$_1$～C$_4$層に細分され下層のもの程、固さ・しまりを欠きC$_1$層では、ほとんど固く・しまりがなくなる。C$_1$層は、にぶい黄褐色土を基本土とするもので褐色土が混入する。C$_2$層は、やや粘性のある黒褐色土を基本土とする。C$_3$層は、粘性のあるやや明るい黒褐色土を基本土とするもので褐色土の混入が多い。C$_4$層は、炭化物粒子を多量に含む粘性の比較的強い黒褐色土を基本土とする。以上のC層中には、多量の中小礫が混入するが、特にC$_3$、C$_4$層に多い。D層は、壁際から底面にかけて堆積するものでD$_1$～D$_3$層に細分される。D$_1$層は、明るい褐色の砂質土を基本土とするので礫が含まれる。固さ・しまりとも中程度である。D$_2$層は、明るい褐色から黄褐色の砂質土を基本土とするもので、やはり礫が含まれる。D$_3$層は、C$_4$層同様、多量の炭化物が含まれるもので褐色土を基本土とす **埋土**





第16図　第2号・3号土坑跡


Y +94183
Y +94186
X −39343
X −39345
A
A'
51.400 m
A1
B1
C1
C2
C3
C4
D1
D2
D3
E
0
1 : 30
2 m

第17図　第４号土坑跡

る。固さ・しまりを欠く。E層は、底面に検出した小ピットに堆積するもので、黒褐色土や褐色土を混入する黄褐色土を基本土とするもので、やわらかくしまりがない。

底面

底面は、全くの平坦面で、中心からやや北東側に0.75×0.65m規模の不整な円形状の小ピットが検出された。

遺物は、C層を中心に出土した。内面黒色処理を施した土師器の坏の小片が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

4　調査のまとめ

青猿Ⅰ遺跡の発掘調査の内容は、以上の通りであった。以下、昭和62年（1987）の調査結果（以下、調査87という）も交え、若干の考察を加えまとめとする。

調査87

今回の調査の対象となったのは、調査87地区とは尾根を境にした西側の斜面部にあたる。調査87では、平安時代の竪穴住居跡、鉄関連遺構そして縄文時代の陥し穴状遺構などを調査している。今回の調査結果からも、当遺跡の最大の特徴は、鉄に関連した遺構や遺物（フイゴの羽口片、鉄滓など）が検出することがある。洞状の斜面下部に鉄関連遺構をつくり、この洞を囲む尾根上に竪穴住居跡を配している。

今回検出した竪穴住居跡２棟は、方形を基調とし規模的にも4.5m前後でカマドも東壁側に設置されるなど類似する。調査87の竪穴住居跡は、規模的には6.5mと大きいが、カマドの構造や出土遺物など似かよった点が多い。

遺物の出土量は、全体的にみて少ない。第２号竪穴住居跡から比較的まとまって出土しているので、以下、第２号竪穴住居跡出土土器を中心に記述する。

器種は、土師器の坏と甕、須恵器の甕片である。坏は極小破片のため図化できず器形を知り得ないが、ロクロ成形で内面黒色処理を施したものや再調整を行っているものがみられる。甕は、口縁部が短かく外反し胴部が膨らむものとそうでないものがある。器面調整には、強いヘラナデや刷毛目などがみられるが、全体的には雑な感じである。また、焼成は良くしまっているが、小石状のものを胎土中に多量に含むものが多い。これらの土師器に須恵器の甕片が共伴しており、時期的には大むね９世紀後半から10世紀代に位置づけられるものである。

土器以外の遺物では、コイブの羽口や鉄滓などの鉄に関連するものや鉄製品がある。中でも第２号竪穴住居跡出土の鉄製品は、形態的にはわらび手刀に似ているが、横断面が長方形状で刃部となっていない。類例が他に見あたらなく名称・用途など不明である。

集落跡

以上、今回の調査の結果、青猿Ⅰ遺跡は、９世紀後半から10世紀にかけて形成された、鉄に関連した集落跡であった可能性が強いと言える。

Ⅳ　千徳城遺跡群

1　千徳城遺跡群について

千徳城遺跡群は、既述のとおり縄文時代から古代そして中世の城館跡から構成されている複合遺跡である。その大半を占めるのが千徳城跡である。　**千徳城遺跡群**

千徳城は、その規模や縄ばりの雄大さ、築城技術などにおいて宮古地方に存在する中世の城館跡の中でも最大級のものである。　**千徳城**

平場は、標高78mと一番の高地にある幅29m、長さ41mのやや変形した五角形を呈する主郭、その南側には、幅35m、長さ130mの副郭があり、北側には二の郭、三の郭、四の郭と主郭を中心として整然と配置されている。各郭は、空堀りや急な斜面で区画されている。また、放射状にのびた尾根の先端部には小平場の砦が築かれている。

城主については、諸説あるが、鎌倉時代初期に来宮した閉伊氏は、はじめ根市館に居を構えたが、鎌倉時代末に嫡子と庶子が対立し閉伊川の北と南の二派に分裂した。そのうち北側を領した河北閉伊氏（員連）によって築城され、時期もこの頃と想定されている。この河北閉伊氏は、はじめ笠間館に居していたが、のちに千徳城に移り千徳氏を名乗ったが、16世紀末の南部氏による廃城に関する文書には、一戸氏が城主となっており（註）、千徳氏から一戸氏への交代がどのようなものであるのか判然としない。

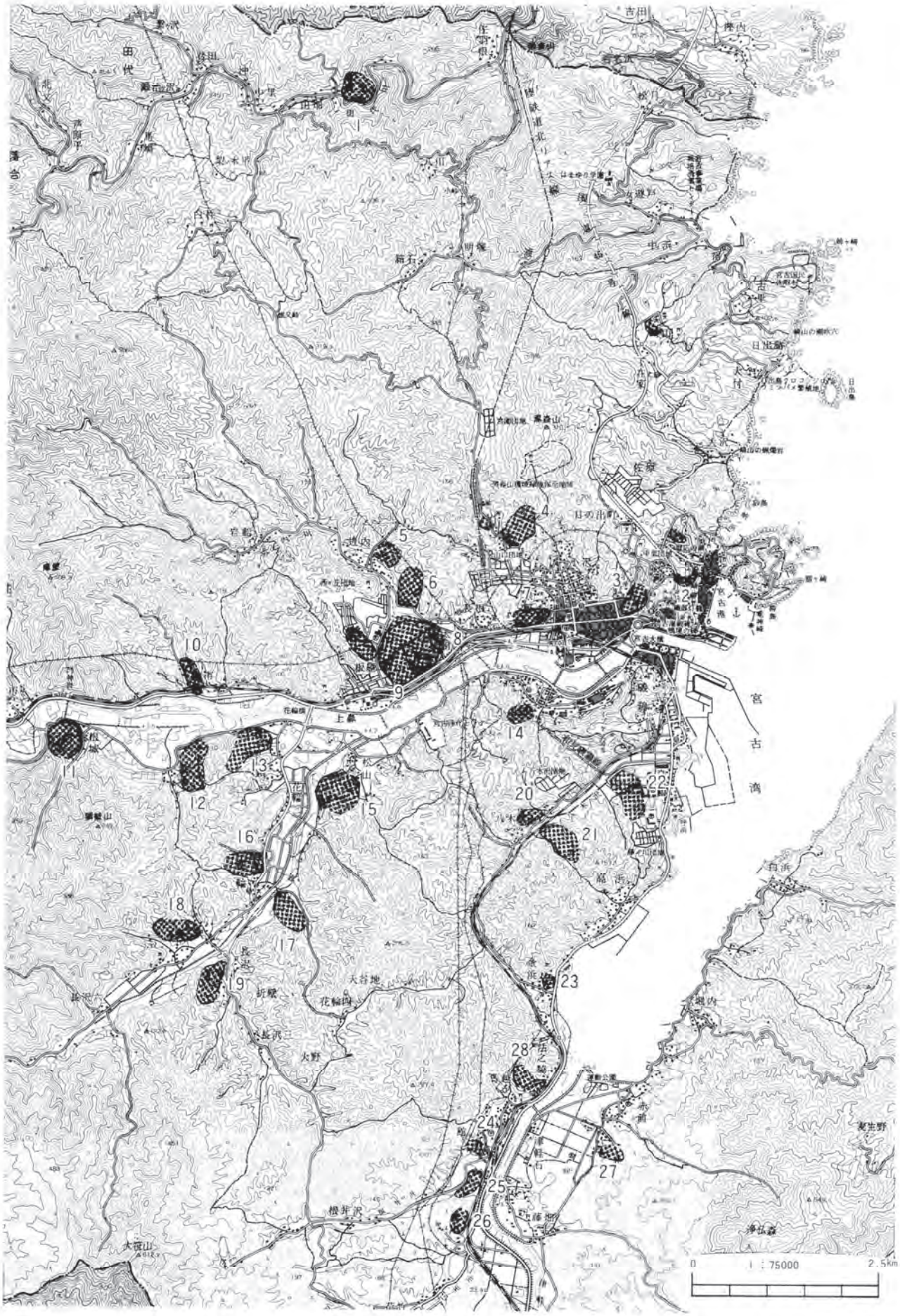
遺跡群の西南部には、千徳城以前に築城されたと考えられている千徳古城、堀合館が存在する。いずれも、ひょうたん形または、五角形状を呈する単郭に帯郭、空堀り、砦などからなるものである。城主などについては、いずれも不詳である。　**千徳古城**　**堀合館**

なお、堀合館の一部は、昭和62年度に発掘調査が実施されており、その結果、館の時期に伴う段状遺構や整地地業跡、土壙跡１基、館以前の耕作痕（畑）などが検出している。整地層からは、ウシ、ウマの獣骨や土師器・須恵器片などが出土している。

遺跡群内の尾根や緩斜面部には、縄文土器や土師器などの土器片が散布しており、縄文時代から奈良・平安時代の古代の遺跡が存在する。

（註）　天正二十年（1592）の『南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事』に「千徳　山城　破　一戸孫三郎持分　庸之供　留守　甲斐守」とあり、城主が千徳氏ではなく一戸氏となっている。

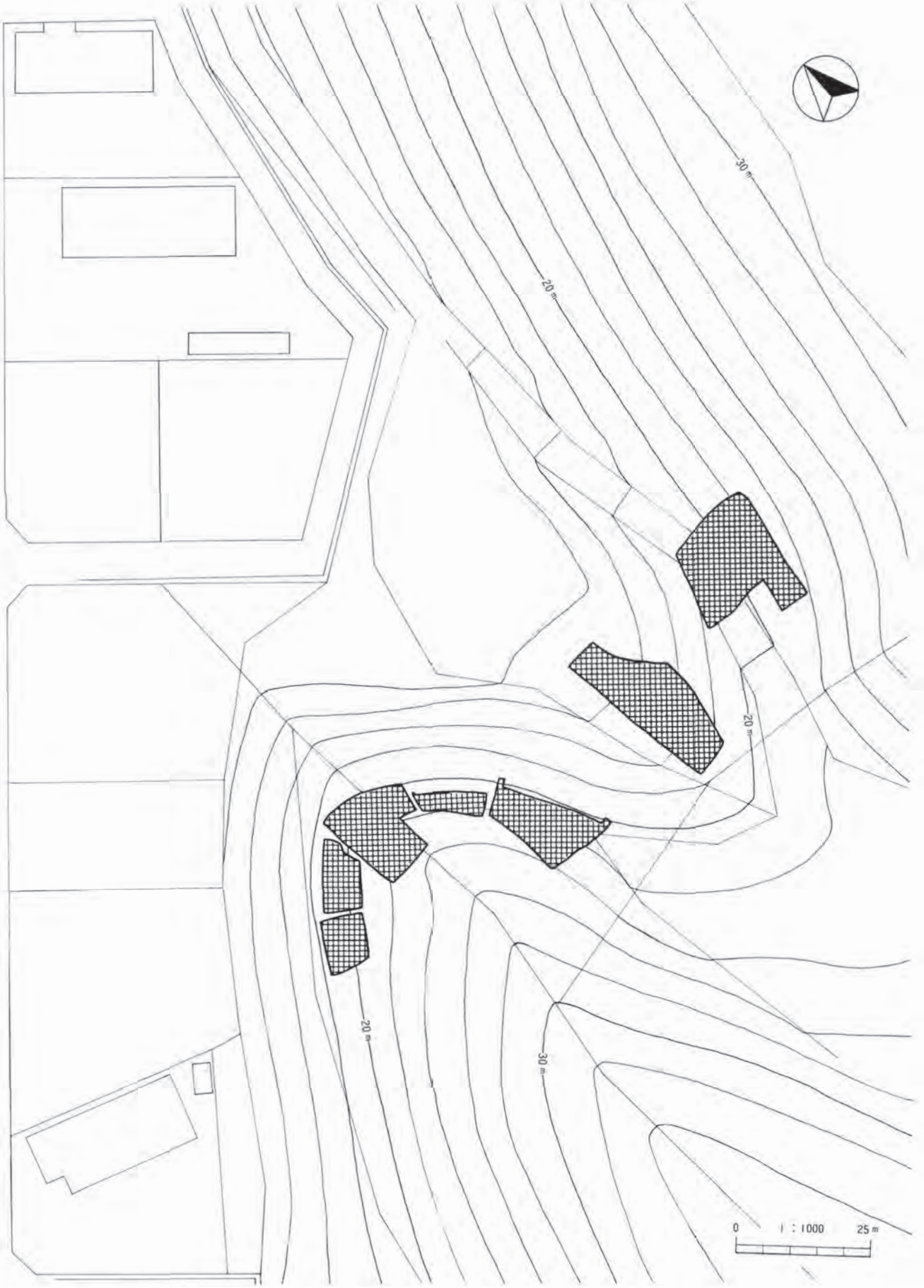
第18図に千徳城周辺の城館位置図を掲載し、その一覧を34ページに記している。市内に存在する城館のほとんどは、閉伊氏に関係するものである。



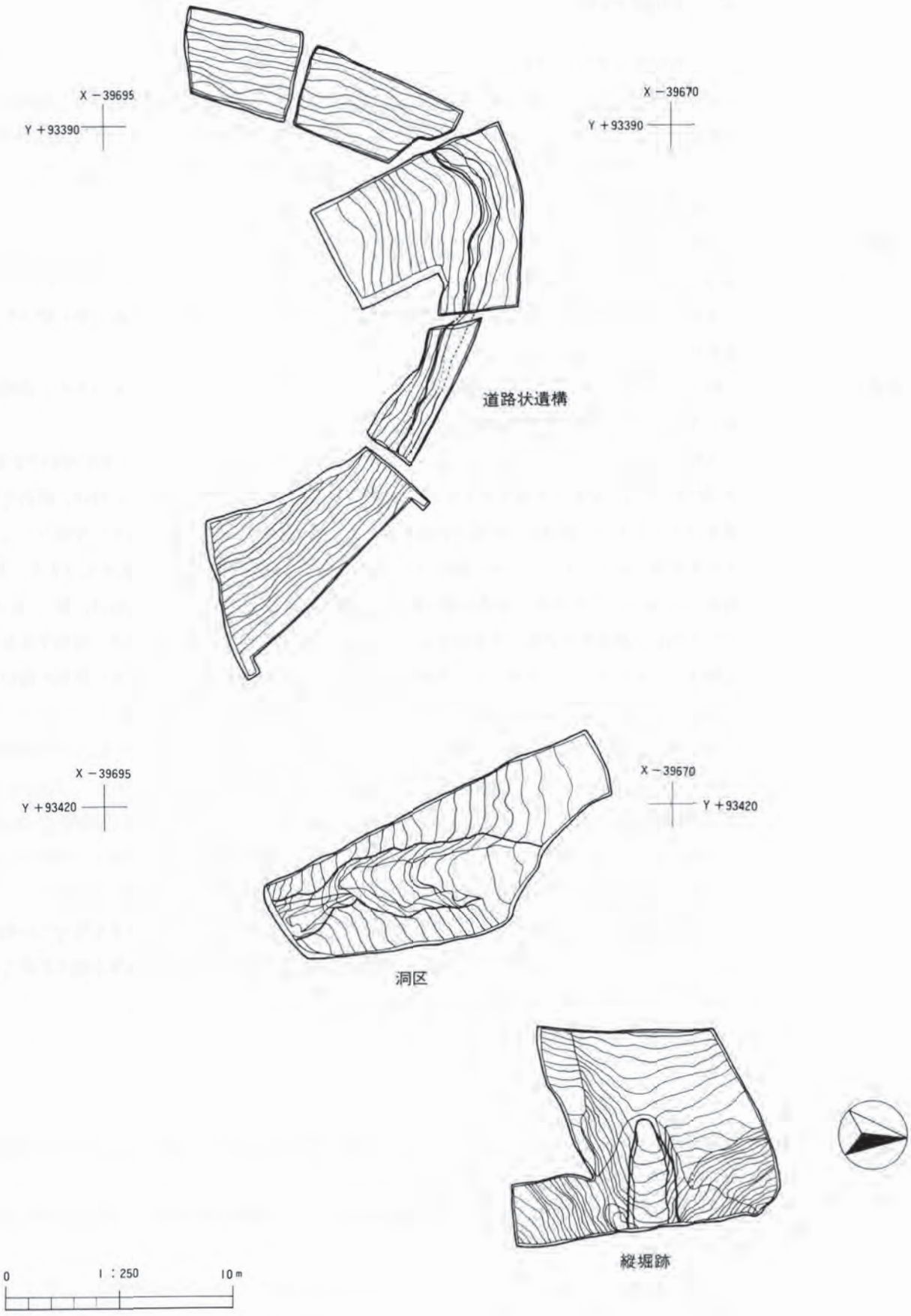
第18図　千徳城周辺の城館位置図

No.	城館名	所在地	築城年代	創建者・館主
1	田代館	田代字吾妻	南北朝時代頃か	田代氏
2	鍬ヶ崎館	鍬ヶ崎下町	室町時代末	河北閉伊氏
3	黒田館	本町	室町時代末	河北閉伊氏
4	山口館	山口字久保	不詳	小笠原氏
5	近内館	近内	室町時代から戦国初期	近内氏
6	近内大館	近内	不詳	不詳
7	笠間館	和見町	南北朝時代初期(14C前半)	閉伊余市員連(かずつら)
8	千徳城	千徳字沢・太田	14C末	河北閉伊氏
9	堀合館	千徳字土子豆	不詳	不詳(千徳城以前)
10	根市館	根市字与藤沢	鎌倉時代末期(14C初頭)	閉伊氏
11	根城	老木字根城	南北朝時代初期(14C前半)	閉伊氏
12	老木館	老木字沢の下	室町時代初期(14C末)	閉伊氏
13	田鎖館	田鎖字三合並	永和年間(1370年代)	田鎖氏
14	小山田館	小山田字館ヶ下	不詳	閉伊氏(田鎖氏)
15	松山館	松山字小深田	南北朝時代末(14C後半)	白根氏
16	花輪館	花輪字程久保	天文15年(1546)	花輪十郎左衛門朝重
17	鱒沢館	花輪向沢・鱒沢	不詳	不詳
18	長沢館	長沢字中家和戸	室町後期から戦国初期	長沢氏(田鎖系)
19	折壁館	長沢字中折壁	室町時代	伊藤氏
20	八木沢新館	八木沢守の越	室町時代	八木沢氏
21	八木沢古館	八木沢湯舟ヶ沢	不詳	弥木沢氏
22	磯鶏館山	磯鶏岸ノ前	不詳	不詳
23	金浜館	金浜西角地	戦国時代	
24	沼里館	津軽石沼里	室町時代中頃	不詳
25	高平館	津軽石字吉原	不詳	不詳
26	払川館	津軽石字払川	室町時代から戦国初期	津軽石氏
27	赤前館	赤前字神田	南北朝時代	赤前治郎左衛門為義
28	山崎館	津軽石字馬越	不詳	山崎氏か

千徳城周辺の城館遺跡一覧



第19図　千徳城遺跡群調査区位置図



第20図　千徳城遺跡群調査区全体図

2　調査内容

(1)　縦堀跡（第21、22図）

調査区内の北側に位置する北―南に走向する尾根に所在する。今回の調査範囲は、尾根の西斜面部の極く一部分にあたるものだが、この尾根を東―西に掘り込んでいる。調査範囲外の現況においても視覚的に縦堀跡にあたると考えられる部分だけが、周囲よりも幾分低くなっているのが観察される。

堀跡

堀跡は、花崗岩の尾根を掘り込んでおり調査範囲内では、上面の幅10.5m、底面の幅2.6m、深さ3.1mをはかるものである。

底面は、花崗岩面で南側に位置する洞部に向かってゆるやかに傾斜し、斜面を突っ切ったままぬける。

埋土

埋土は、A層～C層に大きく分けられる。いずれも砂質土を基本土とするものだが、周囲の固い花崗岩部とは明瞭な相違が認められる。

A層は、縦堀跡の上部を厚く覆うもので比較的固くしまっており、A_1、A_2層に細分される。A_1層は、明るい褐色土を基本土とするもので暗褐色土を塊状に混入する。A_2層は、褐色土を基本土とするもので黄褐色の粘質土が混入する。B層は、中間部に堆積するもので固さ・しまりは中程度である。B_1～B_3層に細分される。B_1層は、黄橙色の砂質土を基本土とする。B_2層は、B_1層よりもやや暗く赤味の強い黄橙色の砂質土を基本土とする。B_3層は、B_1、B_2層よりも明るい黄褐色の砂質土を基本土とする。C層は、中間部から底面にかけて堆積するもので固さ・しまりを欠く。砂質土から花崗岩が風化した粒の大きい真砂土のかなり砂質の強い土を基本土とする。C_1～C_6層に細分される。C_1層は、明黄褐色の砂質土を基本土とするもので真砂土の砂粒ブロックを含む。C_2層は、にぶい黄橙色の砂質から粗砂に近かい土を基本土とするもので、固さ・しまりを全く欠く。C_3層は、明黄褐色の砂質土を基本土とし厚さ1㎝程の粗砂粒の薄い層ないしブロックが含まれる。C_4層は、やや黄色味の強い明黄褐色のほとんど砂に近かい基本土で固さ・しまりがない。C_5層は、明黄褐色の砂質の強い土を基本土とするもの。C_6層は、西壁側から底面中央部にかけて堆積するもので、花崗岩が風化した真砂土の砂礫を基本土とするもので底面中央付近には、風化した花崗岩礫がそのまま残っていた。

以上のA層からC層の縦堀跡の埋土は、下層になるほど周囲の花崗岩礫粒塊の混入が多くなり、また、ほぼレンズ状の堆積状況であり自然に堆積したものと考えられる。

遺物は、全く出土しなかった。

(2)　道路状況遺構（第23図）

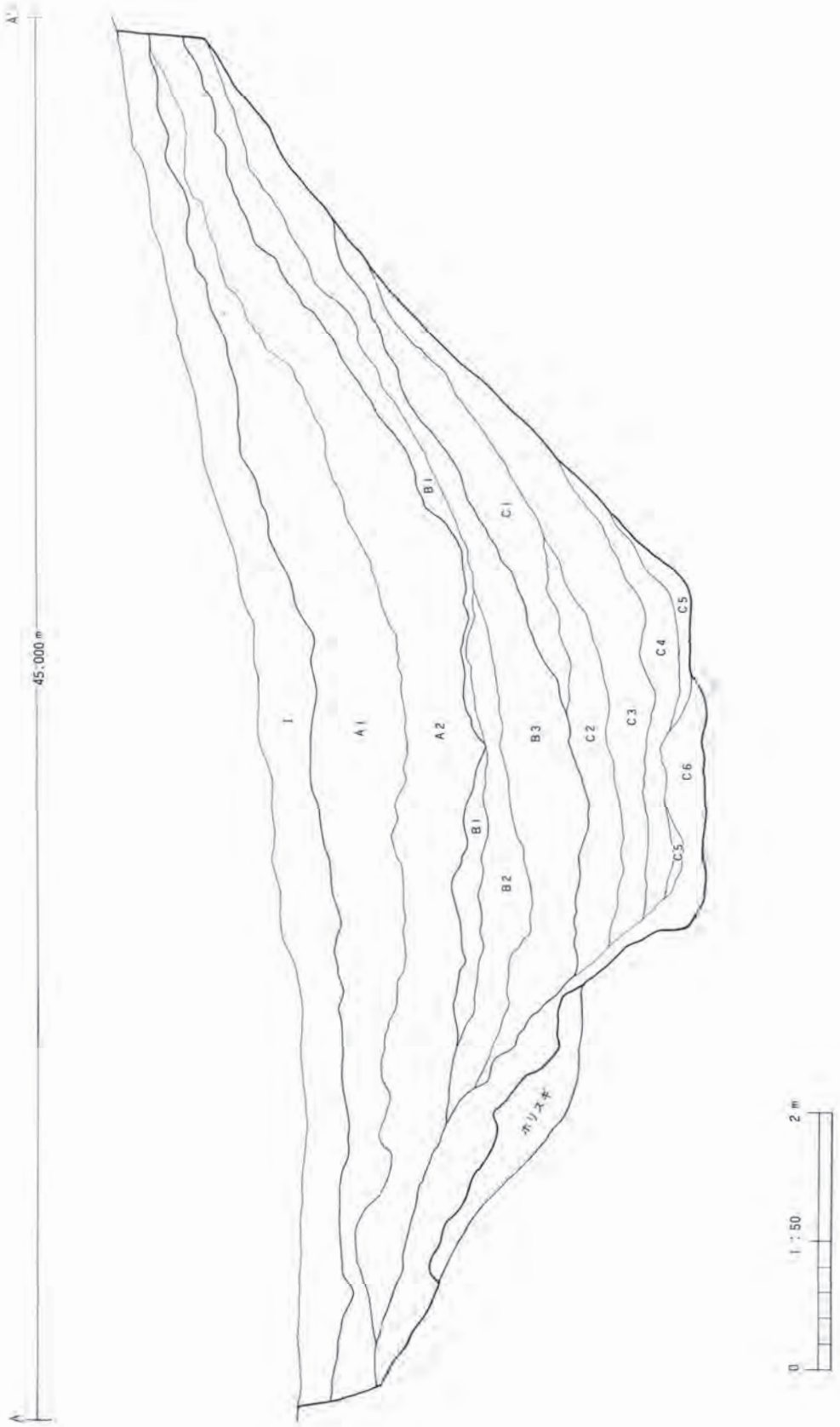
調査区南側の尾根の中ほどに検出したが、尾根の突出部以外の洞に面した斜面部では確認できなかったが、すでに流失したものと考えられる。

検出した部分で総延長は約15mで、道路部分にあたる平坦部は最大部でも約0.6mをはかるものである。

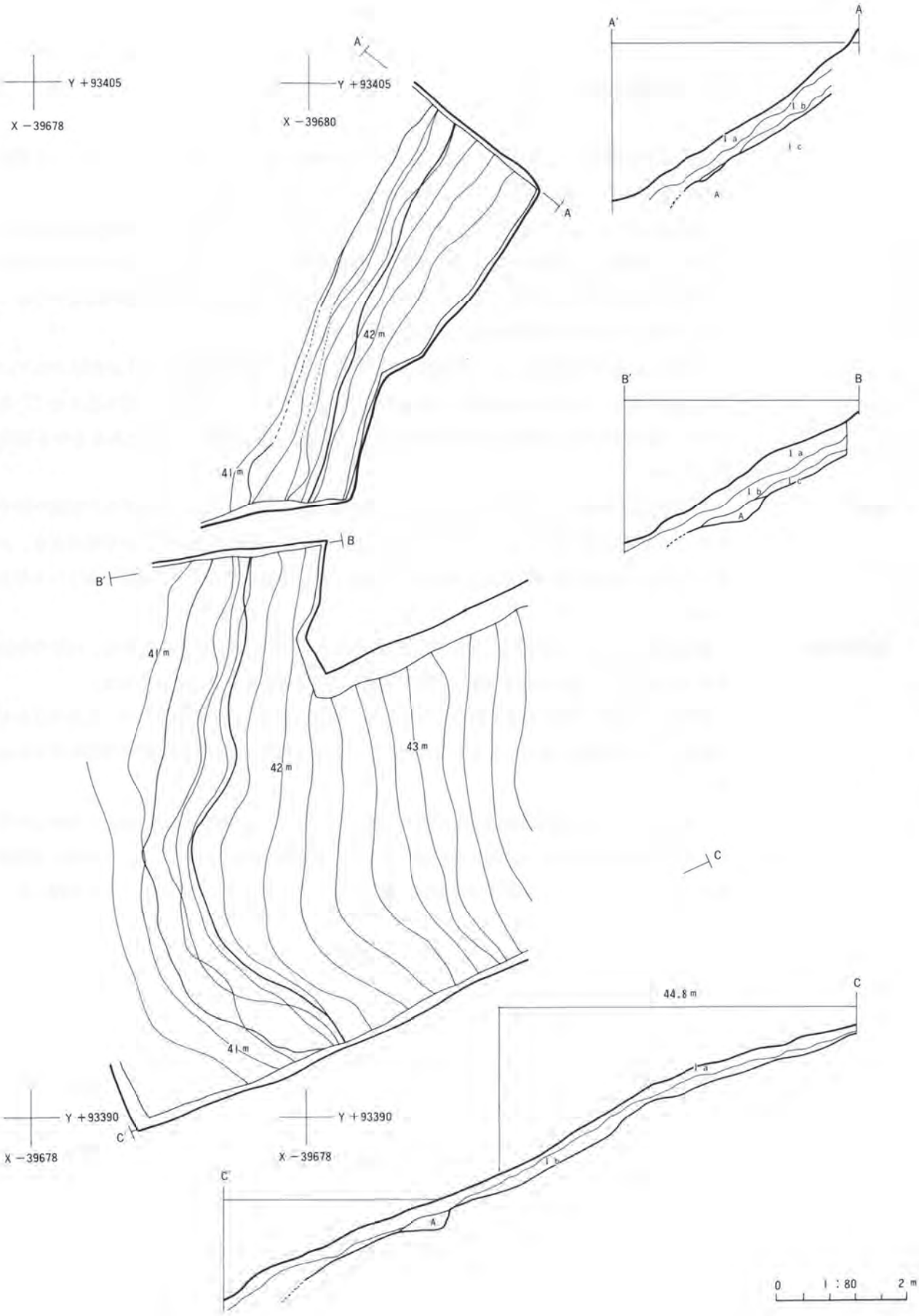
尾根部の埋土は、表土であるI層（I_a、I_b層は表土層、I_c層は地山漸移層）だけで、道路状の平坦部には、黄褐色の砂質土を基本土とし、褐色の砂質土塊の混入したやや汚れたA層

Y +93435
A
42 m
Y +93440
41 m
40 m
39 m
38 m
X −39670
39 m
40 m
41 m
42 m
X −39675
43 m
0
1 : 50
2 m
A'
Y +93435
Y +93440

第21図　縦堀跡平面図



第22図　縦堀跡断面図


Y +93405
X −39678
Y +93405
X −39680
A'
A
42 m
41 m
B'
B
41 m
42 m
43 m
41 m
C
Y +93390
X −39678
Y +93390
X −39678
C'
44.8 m
C
C'
A'
A
I a
I b
I c
A
B'
B
I a
I b
I c
A
I a
I b
A
0
1 : 80
2 m

第23図　道路状遺構図

が堆積する。

3　調査のまとめ

今回の調査で検出した縦堀跡、道路状遺構は、千徳城に伴うものと考えられるが、共伴遺物が出土しなかったため具体的な年代を推定することは不可能である。

宮古市内には31ヶ所の城館跡が確認されているが、現在までに部分的にも発掘調査の行わなれたのは、金浜館、磯鶏館山遺跡、堀合館、鍬ヶ崎館山がある。このうち、鍬ヶ崎館山では館の時期に伴う遺構・遺物は全く発見されなかった。また、磯鶏館山は、現在整理作業を行なっており平成５年度頃には報告も刊行される予定である。

金浜館と磯鶏館山遺跡は、ほぼ全域に及ぶ発掘調査で建物跡や空堀り跡などが検出されている。空堀り跡は、いずれも平場をめぐるもので、金浜館のものは、薬研状に掘り込まれているもので、幅は大むね７ｍ前後、深い所で3.2ｍあり最深部には15cmほどの溝があるものも報告されている。

堀跡

今回検出した堀跡は、平場にめぐるものではなく尾根を横断するように掘られた縦掘り跡である。この尾根の先端部には、おそらく砦が築かれていたと思われるような小平場がある。おそらくこの砦が千徳城の最北西部にあたるもので、敵の侵入を防ぐための縦堀であったと考えられる。

道路状遺構

道路状遺構は、まさに人間１人分の広さしかないもので犬走り的なものである。尾根の中腹をめぐるもので、洞区上部の平場と南側・東側への連絡路であったと考えられる。

洞区は、上部の平場より急に落ち込むもので、溝状の落ち込みを確認したが、底面や壁などの状況から、雨列跡と思われるものである。遺物も全く検出せず、洞の下部では湧水がみられた。

いずれにしても、今回の調査範囲が極めて部分的であり、なおかつ遺物が出土しなかったこともあり各々の遺構のもつ性格などを解明することが出来なかった。しかし、この様な遺構が検出したということで、千徳城の縄ばりが確実にここまで及んでいたということが判明した。

写　真　図　版

青猿Ⅰ遺跡遠景

青猿Ⅰ遺跡調査区（Ｌ区）

第２図版

第１号竪穴住居跡（断面）

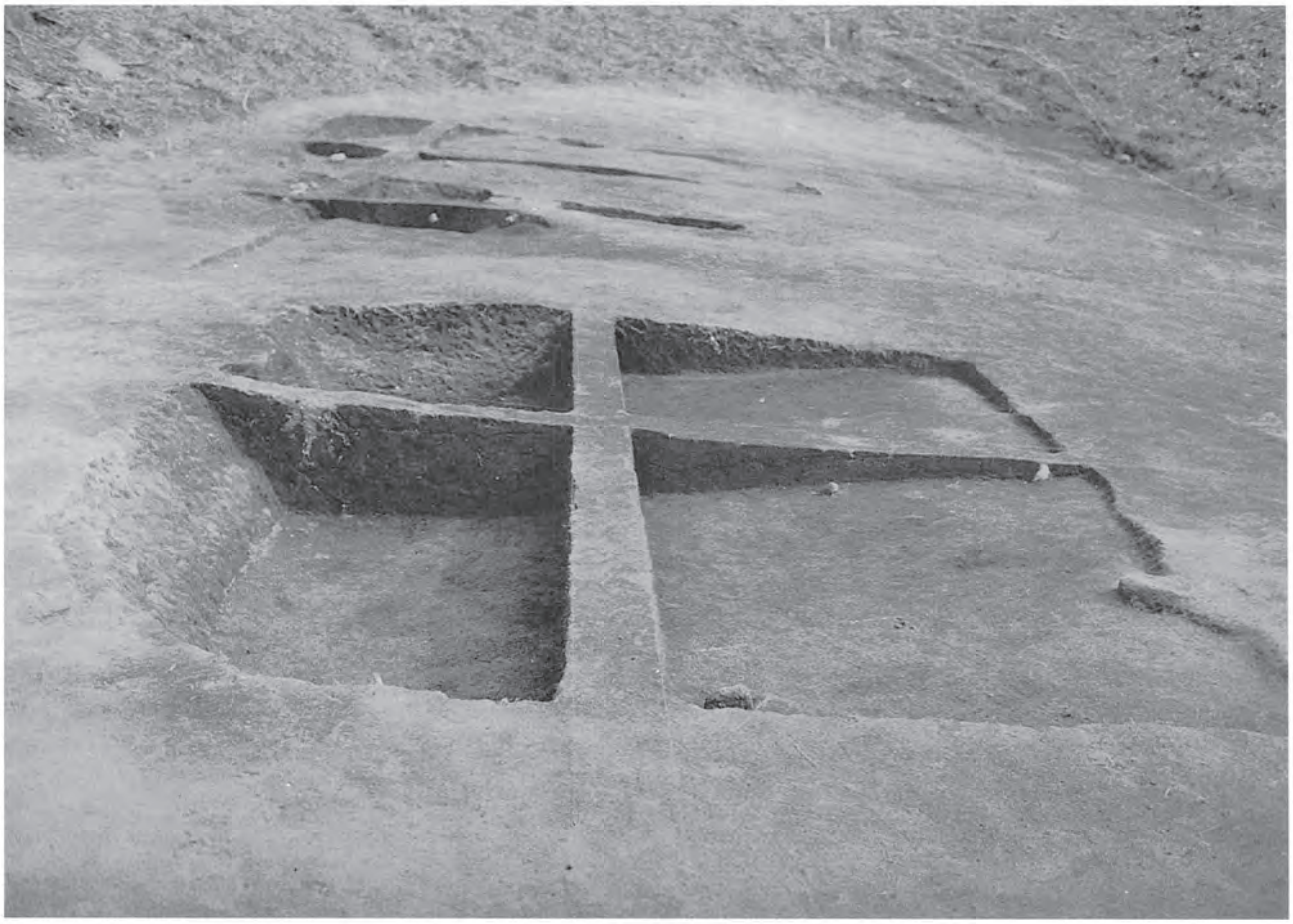
第２号竪穴住居跡

第２号竪穴住居跡カマド跡

同上掘り上がり

第４図版

第３号竪穴住居跡



同上断面

第３号竪穴遺構

第１号土坑跡

第６図版

青猿Ｉ遺跡調査区（Ｉ区）

青猿Ｉ遺跡調査区（Ｊ区）

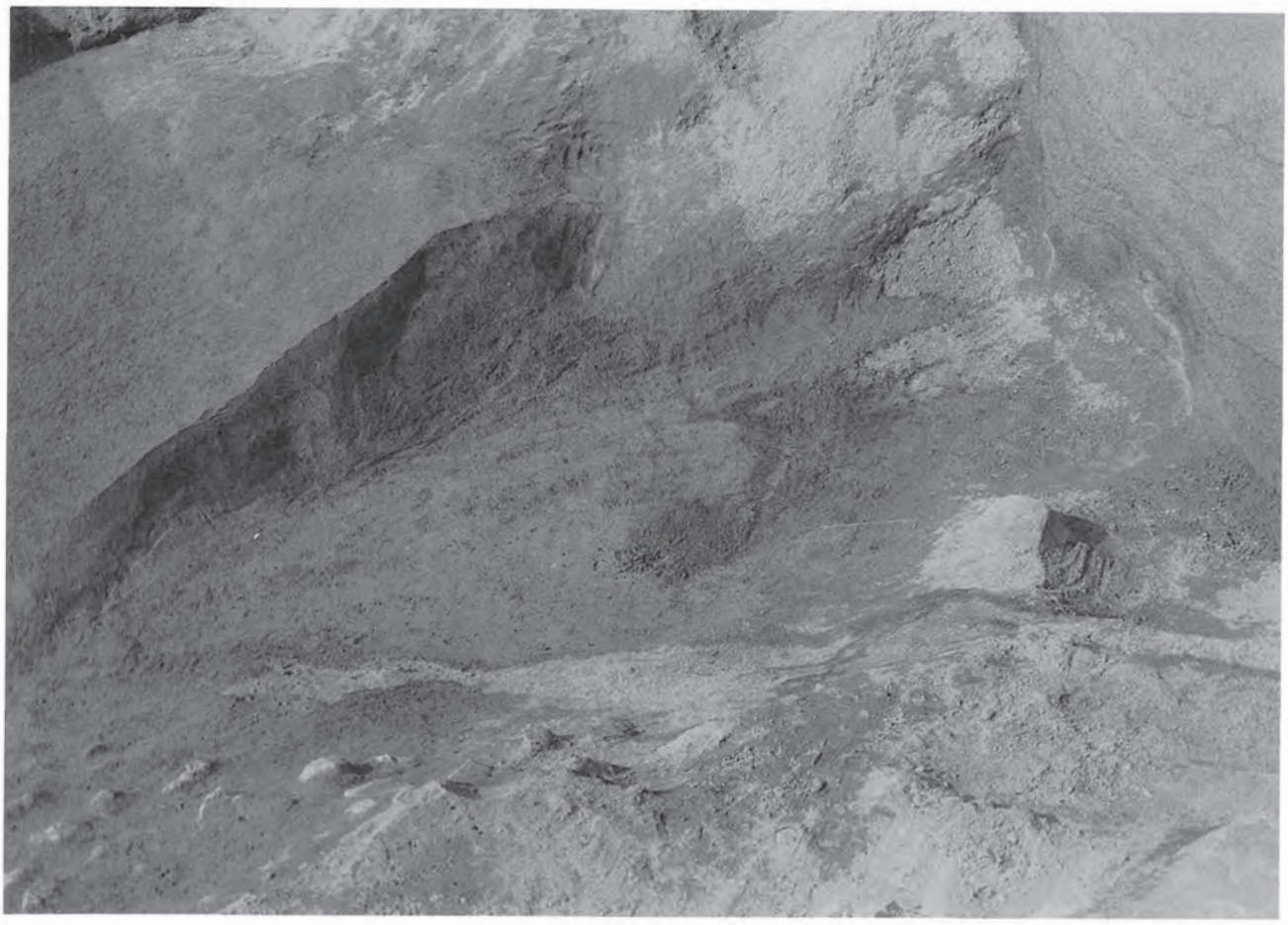
第４号土坑跡

同上　断面

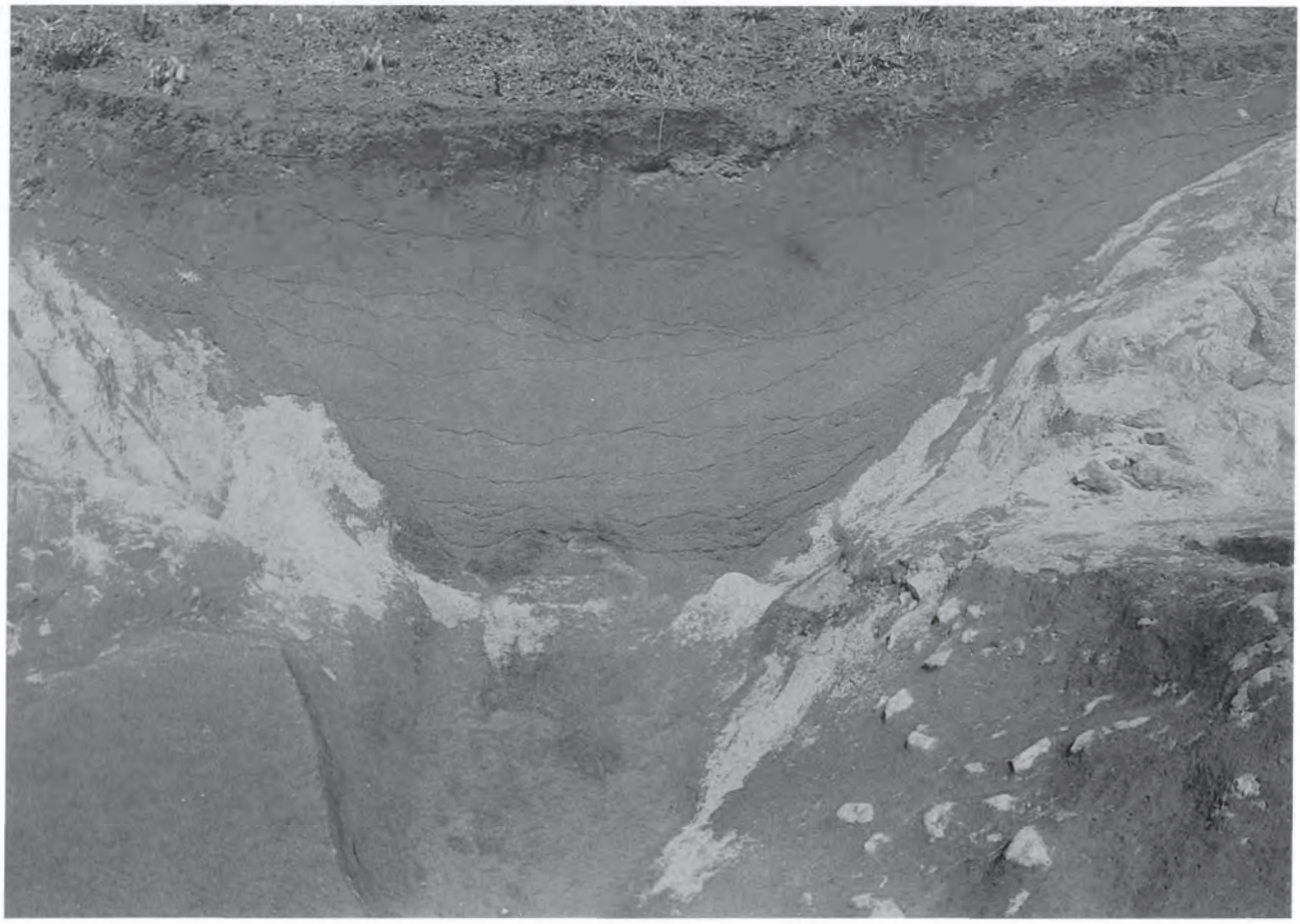
第８図版

千徳城遺跡群調査区近景

縦掘跡



縦掘跡



同上断面

第10図版

道路状遺構

同上断面

洞区（雨列跡？）

同上断面

宮古市埋蔵文化財調査報告書27

青猿Ⅰ遺跡・千徳城遺跡群

—平成元年・２年度発掘調査報告書—

1991.3

発　行　岩手県宮古市教育委員会
〒027 岩手県宮古市新川町２番１号
TEL 0193（62）2111

印　刷　株式会社 文　化　印　刷
〒027 岩手県宮古市大通２丁目５の２